



慰霊碑「筑波海軍航空隊ここにあり」



第136号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会

編集人 金子敬志
 発行人 石井光政
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

暑中お見舞い申し上げます	理事長	藤田幸生	2
巻頭言	理事長	藤田幸生	3
各地慰霊祭参加報告	理事	末光明子	4
戦艦「大和」戦没76年追悼式	理事	高橋 暢	5
秋田県特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭	理事	石井光政	11
千葉縣護國神社特攻勇士之像慰霊祭	専務理事		
会員等投稿			
2016多田野語録	会員	多田野弘	13
私の「戦車特攻」	理事	久納雄二	14
田中賢一さんの三回忌と伝承	理事	大久保通則	21
築城基地開設五十年史より(其の三)	会員	水町勝博	25
海上挺進第26戦隊及び基地第26大隊	会員	水町勝博	31
水無月供養頌	元隊員	佐々野正憲	39
海上挺進第27戦隊及び基地第27大隊	会員	中溝二郎	36
櫻挺進隊及び前田小隊の行動	元隊員	中溝二郎	42
沖繩作戦 海上挺進第二七戦隊史抄	元隊員	伊藤 正	45
顕彰譜(3)	元隊員	伊藤 正	51
連載 山ある記15	会員	池田康博	57
芸欄 歌俳柳の広場			
短歌・俳句・川柳			
事務局からの報告等			
第70回特攻平和観音年次法要について			
年会費未納入の方へお願い			
「靖國カレンダー」の斡旋			
寄付者等の報告			

挿絵提供 空自OB 宇山氏

署中お見舞い申し上げます

公益社団法人 隊友会

会長 藤縄祐爾
 理事 折木良一
 常務理事 増田好平
 常務理事 河野克俊
 常務理事 齊藤治和
 常務執行役 松尾幸弘
 (総務担当)
 事務局長 植木美知男

公益財団法人 偕行社

会長 志摩篤
 相談役 富澤暉
 理事 森勉
 副理事長 深山明敏
 副理事長 熊谷一猛
 副理事長 白石一郎
 専務理事 奥村快也
 事務局長 山越孝雄

公益財団法人 水交会

会長 赤星慶治
 副会長 佐賀幾男
 理事 杉本正彦
 副理事 河野克俊
 専務理事 村川豊
 事務局長 長谷川洋

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 齊藤治和
 副会長 片山隆仁
 副会長 谷井修平
 副会長 戸田眞一郎
 副会長 杉山良行
 副会長 藤田信之
 専務理事 古賀久雄

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村宜伸
 理事 山下輝男
 専務理事 伊藤隆生
 常務理事 國澤輝生

東郷神社

宮司 福田勉

東郷会

会長 友國八郎
 副会長兼理事 田内浩
 編集長 伊藤和雄
 事務局長 足立晴夫

一般社団法人 日本郷友連盟

会長 寺島泰三
 副会長 森勉
 専務理事 越智通隆
 (兼編集長) 富田稔
 常務理事 (兼事務局長) 袴田忠夫

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 杉山蕃
 理事 藤田幸生
 副理事長 岩崎茂
 専務理事兼事務局長 石井光政
 理事 白田智子
 事務局 鮎田英一
 理事 大穂園井
 理事 岡部俊哉
 理事 久納雄二
 理事 福江広明
 理事 阿部軍喜
 監事 羽淵徹也

「巻頭言」

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長

藤田

幸生



世界は、コロナ禍の第三波が、荒れ狂っておりません。

各地での各種特攻慰霊祭も例外では無く、中止、規模縮小、役員のみで実施等の連絡が、続いております。会員の皆様におかれましても、如何お過ごしでしょうか？

先般、4月7日に、呉の海軍墓地で催行されました、戦艦「大和」の慰霊祭に行つてまいりました。慰霊祭は、好天に恵まれ盛大且つ濟々と、実施されました。久し振りででした。さすが、母港である呉の戦艦「大和」慰霊祭でした。

戦艦「大和」の慰霊祭は、各地で実施されてきております。私は、例年、そのどこかには、水交會代表、(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰會代表等として、参列してまい

りました。

戦艦「大和」との最初のきっかけは、測距員の生き残りで、熊野に在る湊龍寺の中道住職という方への、聴き取り訪問でした。そこで、生々しい当時の実話を、お聴きしました。その後、戦艦「大和」の慰霊祭、及び、大和を旗艦とする第二艦隊(第一遊撃部隊)の慰霊祭は、枕崎市火の神公園、徳之島犬田布岬、呉市海軍墓地等で催行、実施されてきました。海自艦艇、航空機他、沢山の人の出逢い、がありました。最初の霞ヶ関高層ビル設計者の池田武邦先輩(海兵、東大出身)、彫刻家で文化勲章受章者の中村晋也先生、伊仙町の大久保明町長、伊藤一弘伊仙町會議員等々の知人が、できました。海岸にあり、塩害で腐食した二六メートル(「大和」の艦橋と同じ)の高い慰霊塔の修復寄付集めもしました。「大和」については、トラック島の巨大な係留ブイ、僚艦「武蔵」のシブヤン海慰霊行等の、思い出も、あります。

これまで多数の慰霊祭に参列させて頂きました。民間個人や団体が主催する慰霊祭は永続が困難になり中止になっています。今回の呉海軍墓地での戦艦大和慰霊祭は、その意味において、コロナ禍の中でもあり、意義のある、慰霊祭でした。全国から関係者が集まり、盛大でした。関係者の皆様のご苦労は如何ばかりであったろうかと、思いました。

私達の「(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰

會」慰霊活動も、終戦直後から、陸海軍の戦友、ご遺族等の有志により、資金を集めて、慰霊法人を創り、活動を続けてまいりました。

当初は、名前も、団体の管轄も違っていました。が、紆余曲折を得て、今があります。所管官庁は、厚生省、厚労省、内閣府と、変わりました。

活動の、内容も、役員も、會員も、変わってきました。特攻隊指揮官等(第一世代)、特攻隊同期生等(第二世代)、特攻隊後輩等(第三世代)、戦後世代(第四世代)へとです。

また、事務所の場所も、私が知っているだけで四ヶ所(虎ノ門の森ビルから浜松町のビル、靖國神社を経て、今の東專堂ビル)と、変わって、移ってきています。

今回のコロナ禍で、人の世の営み方、価値観は、大きく変化することでしょう。戦没者の皆様への慰霊のやり方も、大きく変化するかも知れません。

しかし、この私達が今、受け継いでいる「特攻隊戦没者慰霊顕彰活動」だけは、如何に世の中が変わろうとも継続していかなければならぬものだ、と考えております。そんな気持ちで、今の激動する「コロナ禍の世界」を観察し、過ごしております。會員の皆様におかれましても、どうか御自愛の上、今後とも、慰霊活動へのご参加等をよろしくお願い申し上げます。

戦艦「大和」戦没76年追悼式

会員 末光 明子

さる令和3年4月7日(水)、広島県呉市上長迫町 長迫公園(旧呉海軍墓地)において戦艦「大和」戦没76年追悼式が執り行われました。

戦艦大和会が主催する「大和」追悼式には、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の藤田幸生理理事長をはじめ、呉市長、海上自衛隊呉地方総監部、海上自衛隊第1術科学校、海上自衛隊幹部候補生学校、海上保安大 学校や地元の自治体・企業等の方々にも多数臨席いただき、約300人が参列いたしました。呉海軍墓地には呉海軍鎮守府管轄下の艦船や陸上部隊の慰霊碑90基がお祀りされており、各碑の世話人や戦友会が高齢化によりやむを得ず解散するなか、各碑で行う慰霊祭のなかでは戦艦「大和」は最大規模となります。

戦艦大和会の歴史は、昭和28年に第二艦隊副官の石田恒夫会長が発起人として戦艦大和生存者会を結成、昭和54年に『戦艦大和戦死者之碑』を建立、細田久一会長が平成7年の50回忌を機に解散、その後元乗組員や遺族らによって4月7日に慰霊祭を執り行ってまいりました。平成26年に有志らにより再結成し、乗組

員であった廣一志氏が4代目会長を勤めておりましたが昨年10月に享年96歳にて逝去され、元呉市長である小笠原臣也氏が5代目会長として就任し、現在に至ります。

追悼式では、散華されました戦艦「大和」の乗組員をはじめ、戦後亡くなられた歴代会長や乗組員、そして護衛に当たり散華された第2水雷戦隊の乗組員、および呉海軍工廠で建造中に亡くなられた工員の皆様に感謝と哀悼の誠をささげご冥福をお祈りしました。また、現代を生きる我々が大和乗組員らの意志を受け継ぎ、英霊の慰霊を今後も変わりなく継承させていただくことをお誓い申し上げます。

現在、大和会会員は有志を含め約200名、追悼式は誰でも参加可能としていきます。今後とも諸先輩方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末光 明子

戦艦大和会 広報理事

呉海軍墓地顕彰保存会 職員

戦艦大和会ホームページ

[https://:senkanyamatokai.amebaownd.c](https://senkanyamatokai.amebaownd.c)

〇〇



『第三十回・秋田県特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭』に参加して

会員 高橋 暢

一 招魂祭

令和三年四月二十九日(日)正午より、総社神社(秋田県秋田市川尻総社町十四の六・川尻孝紀宮司)に於いて、「第三十回・秋田県特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭」が秋田県特別攻撃隊招魂祭実行委員会の主催で行われた。

来賓として、出版社社長でNPO法人「ふるさとにつぼんプロジェクト」理事長の倉秀人氏、ジャーナリストの上島嘉郎氏、俳優の上島尚子氏、ジャーナリストの葛城奈海氏、歌手のSAYA氏を迎え、参加者は総勢約二十名であった。

今回は記念すべき第三十回目の招魂祭であったが、新型コロナウイルス感染症予防のため参加人数を制限し、感染対策に万全を期しての開催となった。

朝のうち強かった雨脚も徐々に回復はしていたが、依然として雨雲が低く垂れ込め、いつまた降り出してもおかしくない空模様だった。

十一時半頃、私が総社神社の広大な境内の一角に設けられた式典会場に行くと、誰よりも早く藤本光男さんが来場された。

走り寄って挨拶をすると「今年、九十歳！」と元氣な笑顔でお答えになる。杖を使っておられるが、姿勢はいまだに元帝国軍人のそれであり、耳もはつきり聞こえるし頭脳も明快である。

藤本光男さんは第十二期海軍甲種飛行予科練習生出身の元偵察員。海軍明治基地で夜間戦闘機「月光」に乗ってB29邀撃戦に参加。その後、藤枝基地に移り、夜間戦闘機型「彗星」で昼夜逆転の過酷な訓練に明け暮れた。招魂祭では、平成五年から追悼の言葉を読まれている。

正午、招魂祭開式。一同、昭和天皇武蔵野御陵を遙拝。雅楽による国歌吹奏。そして佐々木三知夫さんによって「国の鎮め」のラップが奉納された。

佐々木さんは元秋田県庁職員で、現在は、障がい者のためのNPO法人「あゆみの会」や、企業組合農藝舎、農事組合法人新田水稲生産組合などの代表理事として、秋田県の農業、貿易、福祉と幅広い活動をしている。

高校、大学とトランプを吹いていた佐々木さんは、本招魂祭初代主宰者・故舛谷健夫さん(元・第三特攻隊震洋隊隊員)の講演を聞いた事が縁で、「国の鎮め」のラップ奉納を行うようになった。

佐々木さんの使用するラップは、サイ

パン島の戦いの際に米海兵隊の兵士が戦利品として日章旗と共に持ち帰ったもので、その後、在米日本人を介して五十年ぶりに日本に返却された「里帰りラップ」である。

日章旗に「秋田」の添え書きがあつたことから秋田県庁に問い合わせがあり、当時国保援護課勤務だった佐々木さんが調査にあたった。その結果、日章旗は遺族の元に返すことができたが、ラップの持ち主はついに判明しなかった。

ラップは持ち主不明のまま、秋田県遺族会館、陸上自衛隊秋田駐屯地資料館などで保管され、今は佐々木さんが県庁退職後に立ち上げた「秋田ふるさとづくり研究所」事務所内に「里帰り神社」御本尊として祀られている。

この「里帰りラップ」は、本招魂祭のほか、戦友会、遺族会、シベリア抑留戦没者を慰霊する抑留回想平和記念碑での慰霊祭などで、「国の鎮め」を奏でている。

「かれこれ二十四、五年、このラップで『国の鎮め』を吹いているが、なかなかうまく吹けない。でも今日はどうやら上手く吹けました。」佐々木さんは式後に穏やかに微笑んでいた。

「国の鎮め」に続き、神事、神前神楽の奉納が行われ、続いて、司会の小野立

さんが、秋田県陸海軍特別攻撃隊五十六柱のご芳名を朗読した。

司会の小野さんの曾祖父は、戦争当時能代八幡神社近くで料亭を経営しており、陸軍能代飛行場（東雲飛行場）で訓練する若い特攻隊員達が前線基地へ向かう際には、私財を投げ打って盛大な壮行会を開催し、八幡神社での必勝祈願にも参列して、特攻隊員達を見送ったと言う。

現在、能代八幡神社には特攻勇士の像が建立され、毎年六月二十日に「東雲飛行場戦歿者慰霊祭」が陸士六十期の武田安一さんを主催者として行われているが、小野さんは同慰霊祭運営を長年に渡って補佐しており、武田さんの意志を次世代に引き継ごうと活動している。

英霊ご芳名朗読に続き、藤本光男さんが追悼の言葉を朗読した。冒頭で藤本さんは、第十二期甲種飛行予科練同期の特攻隊員六名に呼びかけた。

昭和十八年六月一日に土浦航空隊の門をくぐり、九ヶ月に渡る厳しい訓練を共にした同郷の戦友達。七十六年前、硫黄島に、沖繩に、そして宮城県沖に、若い命を散華させた若鷲たちである。

信太廣蔵少尉（大正十四年四月二十二日生・二十一歳没）は能代市出身。神風特別攻撃隊第二御盾隊・天山雷撃隊第四

小隊四番機偵察員として、昭和二十年二月二十一日正午に八丈島より出撃。十六時から十八時の間に硫黄島周辺の敵艦船に突入散華した。

高橋忠少尉（大正十五年七月十日生・二十歳没）は山内村（現横手市）出身。神風特別攻撃隊第二八幡護皇隊・九七式艦攻隊一番機電信員として昭和二十年四月十二日午前十一時から正午にかけて僚機二十一機と共に串良基地より出撃。一四四一「我戦艦二体当リス」と打電し、沖繩周辺海域で突入散華した。

山本英司少尉（大正十五年六月七日生・二十歳没）は角館町（現仙北市）出身。神風特別攻撃隊神雷部隊第九建武隊隊員。五百キロ爆装の零戦操縦員として、四月二十九日十四四二、鹿屋基地より出撃。一七二一「我空母二突入」を打電し、沖繩本島東方の敵艦船群に突入散華した。

角館町（現仙北市）出身の石橋賢司少尉（大正十五年六月十三日生・二十歳没）は神風特別攻撃隊菊水雷撃隊・天山雷撃隊第四小隊二番機電信員として、大曲市（現大仙市）出身の桑野正昭少尉（昭和二年二月二十三日生・十九歳没）は同隊第一小隊一番機電信員として、昭和二十年五月十一日〇五四八、串良基地より天山艦攻十二機で出撃。同〇九〇六、石橋一飛曹（当時）より「敵飛行機見ユ」

との打電を最後に、沖繩本島西方で散華した。

小松文男少尉（昭和二年一月三日生・十九歳没）は湯沢市出身。神風特別攻撃隊第七御盾隊第二次流星隊二番機偵察員として、八月九日一四一五に木更津基地より出撃、「一五二〇敵空母見ユ」と打電し、宮城県金華山沖の敵航空母艦に突入散華した。

予科練の厳しい生活の中で、入浴は息つける数少ない憩いの場だったそうだ。丸坊主に丸裸。皆同じように見えるのだが不思議と見分けが付き、湯船では自然と同郷同士が固まって、そこそこにお国訛りの話に花が咲いたと言う。

能代市出身の藤本さんは、角館出身の山本英司さんと馬が合い、バス（湯船）では良く互いの故郷の話をしたそうだ。角館と言えば武家屋敷と桜並木。藤本さんが角館の桜を褒めると、山本さんはバスにつかかって目を細めた。

山本英司さんは運動神経抜群。神宮競技場で行われた全国体育大会に予科練代表選手として出場し、観衆の前で見事な予科練体操を披露した。生真面目で不正を許さない厳格な男。それでいて性格はさっぱりしていた。山本さんは操縦専修に進み、零戦乗りとなった。

実は昨年の本招魂祭は、新型コロナ感染症の影響で、神職と招魂祭実行委員長の山本高敬さん、舛谷政雄さんのみで行われ、恒例のシンポジウムは中止となった。

そこで舛谷さんはシンポジウムの代わりの特別企画として、映像作家の阿部輝忠さんと共に、藤本さんのインタビュを含む動画映像を制作し、インターネットで公開した。

すると、それを観た宮城県のある高校から「ぜひ藤本さんのお話を生徒に聞かせたい」と言う申し出があり、昨年十二月、秋田を訪れた高校生達を前に、藤本さんがご自身の戦争体験を語る機会があった。

当初、藤本さんは、現代の若者に自分の話が伝わるかどうか半信半疑だったと言うが、高校生達は藤本さんの話に真剣に耳を傾け、後日、彼らから丁寧な礼状が届いたと言う。

歴史の教科書でしか知らない戦争。その戦争を実際に戦った藤本さんの話を直接聞く事は、高校生達にとってこの上なく貴重な体験だったに違いないし、藤本さんにとっても、ご自身の想いが現代の若者に十分通じた事は大きな喜びだったのではないだろうか。

追悼の言葉の中で藤本さんは、過日の

高校生達との交流を、同期生達に報告するのだった。

藤本さんの追悼の言葉に続き、大西瀧次郎海軍中将の遺書が実行委員長の山本高敬さんによって朗読され、続いて、来賓の倉秀人さん、上島嘉郎さん、上島尚子さん、葛城奈海さん、SAYAさんらによる玉串拝礼が行われ、撤饌の儀、昇神の儀をもって神事が終了した。

神事に続き特攻隊員の遺書の朗読が行われた、最初に関豊興海軍大尉の遺書が、葛城奈海さんによって朗読された。

関豊興海軍大尉は大正十二年一月二十一日、鹿角市生まれ。明治学院大学在学中に学徒出征し第十四期海軍予備学生となった。横須賀海軍航海学校在学中に「回天」搭乗員を志願。

昭和二十年七月十四日、伊第五十三号潜水艦を母艦とする神潮特別攻撃隊多門隊隊員として山口県大津島基地より出撃。八月四日、フィリピン・エンガノ岬沖で体当たり攻撃を敢行し、米海軍護衛駆逐艦アールV・ジョンソンを損傷させた。

父上様 母上様

二十三星霜の御高恩、心より御礼申上候。万感胸に到りて、一句も無之候。何卒、意中、御察被下度候。

父母上様の御健康を神かけて祈りつつ、出撃致す心算に候。

峰高き五の宮の山、そのよはひ我がたらちねの父母にこそやれ風邪引くな さむからぬかと 我が夜着を

たれかとりみん 父母ならずして追伸
大館にての写真、並に御守、有難く頂戴仕候。多聞とは楠公幼時の名前にて候。本隊の回天隊も頼山陽の楠公論の所に見ゆる如く、天日の既にかくるるを回すより起きたる名にて候。

同書並にハンカチの血は小生の血にて書けるものにて候。菊水の流れの如く、七生報国を誓い申上候。

続いて、伊藤甲子郎陸軍少尉の遺書が、SAYAさんによって朗読された。

伊藤甲子郎陸軍少尉は、大正十四年一月二日、横手市生まれ。昭和十六年十月東京陸軍航空学校入隊。熊谷飛行学校第十三期少年飛行兵・操縦。

昭和二十年六月八日、特別攻撃隊第四十八振武隊隊員として、一式戦闘機「隼」で知覧基地より出撃。沖縄周辺海域で敵艦船に体当たり攻撃を敢行した。「落下傘の切れ端に書いてあった書」

いざ故郷に帰へらむ

何時の日も、何時の日も
 樂しかりし、吾が村
 常に吾が喜びなりし

さらば故郷
 さらば父母 妹 弟よ

懐かしの山
 思い出の川

別れの言葉 残して今
 告國の為に 吾は征く

甲子郎

歌手として活動するSAYAさんは、
 伊藤少尉の遺書の朗読の前後に、「秋田
 県民歌」と「ふるさと」を独唱献歌した。

昭和五年に制定された「秋田県民歌」
 は、山形県民歌、長野県民歌と並び三大
 県民歌と称される。作曲は秋田県出身の
 成田為三、歌詞は公募され、秋田県出身
 の倉田政嗣の歌詞が採用されたが、その
 歌詞を補作したのが「ふるさと」の作詞
 者である高野辰之であった。

昭和五十七年、舛谷健夫さん、舛谷ヤ
 スエさん夫妻がライフワークとしていた
 「秋田県戦没者芳名録」の最後の贈呈式
 の際、プロの歌手に依頼して秋田県民歌
 を歌ってもらった。その際、受付を担当
 していた若き舛谷政雄さんに遺族から、
 「ふるさと」も歌って欲しかったという
 要望があったと言う。

今回の「秋田県民歌」と「ふるさと」
 の二つの献歌は、父健夫さんと母ヤスエ
 さんの功績への感謝と、あのとときの遺族
 からの要望に応える形として、三十九年
 越しに政雄さんの思いが実現したもので
 あった。

式典は舛谷政雄さんによる主催者挨拶。
 実行委員長の山本高敬さんによる聖寿万
 歳。SAYAさんによる「海ゆかば」の
 独唱をもって終了した。

葛城奈海さん、SAYAさんによる遺
 書朗読の頃からは再び雨脚が強り、それ
 があたかも英霊が天で涙しているかのよ
 うであった。

二 シンポジウム

招魂祭終了後、秋田パークホテルに会
 場を移して、「第三十回秋田県特攻慰霊
 シンポジウム」が開かれた。こちらも座
 席を空けて消毒を徹底するなど、感染対
 策を万全にしての開催だった。

シンポジウムの冒頭、本荘市出身の特
 攻隊員植村正次郎中尉の妻の良(りょう)
 さんから舛谷健夫さんに届いた手紙(秋
 田県海軍戦記ITツバサ広業出版部掲載)
 が、女優の上島尚子さんによって朗読さ
 れた。

上島尚子さんは、鹿児島県鹿屋市出身。
 母親の実家は、かつて海軍御用達だった
 「富久屋」と言う和菓子店であり、鹿屋

基地で出撃を控えた特攻隊員も良く訪れ
 ていたそうだ。出撃の際、特攻隊員達は
 上島さんの祖父の心尽くしのタルトを機
 上に持って飛び立って行ったと言う。

小さい頃から特攻や特攻隊員のことを
 耳にすることが多かった上島さんにとつ
 て特攻隊は身近な存在だったそうだ。上
 島さんは平成二十年に靖国神社で行われ
 た奉納野外劇「俺は、君のためにこそ死
 に行く」にも出演されている。

植村正次郎中尉は大正九年一月三日、
 本荘市に生まれた。

撃墜王・西澤廣義中尉と同期の第七期
 海軍乙種飛行予科練習生。ミッドウエー
 海戦では、空母「蒼龍」乗組の艦攻操縦
 員として奮戦。その後陸攻操縦員となつ
 た。

昭和十六年に同じ本荘市出身の菊池良
 さんと入籍。昭和十八年には長男を授か
 り、親子三人水入らずの幸せな生活を送
 るが、昭和二十年三月二十一日、野中五
 郎少佐を指揮官とする神風桜花特別攻撃
 隊神雷部隊陸攻隊、第二中隊第一小隊三
 番機の操縦員として鹿屋基地より出撃。
 四国沖の米機動部隊攻撃に向かう途中、
 米戦闘機の攻撃で散華した。

舛谷健夫さんに届いた良さんからの長
 文の手紙には、夫・正次郎との生活は短
 かいものであったが、その限られた日々

がいかにも尊いものであったか、そして夫との思い出、夫が残した言葉や手紙が、戦後の自分をいかに勇気づけてくれたかが綴られており、上島さんの印象的な朗読と、当時の写真や資料映像、音楽とのコラボレーションによって、一つの物語のように感動的に披露された。

続いて、三十周年記念フォーラムとして、ジャーナリストの上島嘉郎さんをコーディネーター、藤本光男さん、倉秀人さんをゲストとして「キミガタメ、今こそ英霊の想いを語り継ぐ！」が開催された。上島さんが次世代の日本人に伝えたいことについてお二人に尋ねると、藤本さんは「日本が明治以来、欧米列強と戦って独立を保った民族の誇りを忘れないで欲しい」と語り、倉さんはご自身が代表を務めるNPO法人の活動を通じて、三代先の子供達に正しい日本の歴史を伝えていきたいと熱く語った。

倉秀人さんは、健康、食育、社会問題、会社案内など多岐にわたるジャンルをマンガで伝えるユニークな出版社の社長であり、NPO法人「ふるさとにつぼんプロジェクト」代表として、マンガで子供達に日本の歴史を伝える活動を精力的に行っている。ご自身は鹿児島出身で、高校時代に教えを受けた先生は、戦時中、特攻隊員の世話をしていた。

かくばかり 醜き国に なりたるか
捧げし人の ただに惜しまる

昭和万葉集に納められたこの歌を初めて知ったとき、倉さんは大変な衝撃を受けたと言う。

「この歌の通りだ。こんなみっともない国にするために二百四十六万柱の英霊が死んだはずがない。」

倉さんは、自分独自のやり方で次世代の子供達に日本人の伝統と誇りを伝えるため、歴史マンガの制作を始めた。

真珠湾攻撃の九軍神の慰霊祭を継承する人々の物語。人間魚雷「回天」隊員と回天の母・重さんの物語。「エルトウール号」の逸話から見るトルコと日本の友好の物語。

歴史の教科書では触れないが、日本人としては是非知っていて欲しい歴史的な題材をマンガ化し、子供達に配布している。歴史マンガのラインナップは今後もさらに増えていく予定だ。

今回の秋田県特別攻撃隊招魂祭ならびにシンポジウムの大きなテーマは、「いかにして先人の想いを次世代に語り継いでいくか」ということであった。招魂祭での英霊の遺書朗読、シンポジウムでの英霊の妻の手紙の朗読には、「いかにして後世に顕彰するか」と言う、主催者舛谷政雄さんの深い思いがあった。

ご尊父健夫さんが秋田県特別攻撃隊忠魂碑を建立されてから三十年の時が過ぎ、健夫さん始め、旧帝国軍人、ご遺族など、あの戦争を経験した人々が一人また一人と亡くなった。これまでの世代は戦争経験者から話を聞く事ができたが、これらの世代はその機会もなく、ますますあの戦争が歴史の一ページとして遠くなるばかりだ。

「今回、遺書を何点か朗読し、令和に蘇った昭和の英霊の声として、今を生きる若者が先人たちに思いを馳せる端緒になつてもらえれば、父も安堵するだろうと信じ、仲間と相談して企画しました。」政雄さんは招魂祭の挨拶でそう述べた。

このような事情は本招魂祭に限らず、日本各地の慰霊祭に共通することではな

いだろうか。
あの戦争の記憶の分岐点にさしかかりつつある今、これからいかにしてこのような慰霊祭を継承していくかはまさに焦眉の急であり、その為にどのように顕彰していくべきかを真剣に考えなければいけない大事な転機である。

今回、秋田県特別攻撃隊招魂祭ならびにシンポジウムに参加し、舛谷政雄さんの英霊の遺書朗読の取り組み、そして、倉秀人さんの子供達にマンガで歴史を伝える活動に、特攻隊慰霊・顕彰の新たな

あり方の一つを見た気がした。

シンポジウムが終わってロビーに降りると、藤本さんがソファに座って実行委員長の高木さんと談笑しながらタクシーを待っておられた。

杖の上に両手を乗せて座る藤本さんの背筋は真つ直ぐに伸び、実際のお歳より若い印象を受ける。

七十六年前、藤本さんは「月光」、「彗星」の後部座席で、このように毅然と座って任務にあたっていた若干二十歳の若鷲だった。

郷土秋田から予科練に入り、同期生と切磋琢磨しながら厳しい訓練に耐えて巣立った雛鷲は、地獄の飛練での訓練を経て、実施部隊での熾烈な空の戦いの中で常に己の極限の力で飛翔し、一人前の荒鷲となった。

そして今、藤本さんは、あの戦争を次の世代に語り継ぐ郷土最後の海鷲として、終わりなき戦いを続けている。

ロビーの大きな窓越しに見える秋田の街は雨に濡れそぼり、その景色の中にタクシーが到着するのが見えた。山本高敬さんと共に藤本さんをタクシーまでエスコートすると、藤本さんは軽く会釈して車上の人となった。

来年もまたお元気な姿で「今年、九十

六歳！」と笑う藤本さんにお会いするのが楽しみである。

参考文献

『秋田県の特攻隊員』ツバサ広業出版部・非売品

『秋田県特攻隊招魂祭をふりかえって』ツバサ広業株式会社・非売品



招魂祭終了後の集合写真

『第十二期海軍甲種飛行豫科練修生戦死者の記録』石川知里・非売品

『人間爆弾と呼ばれて』文藝春秋
写真提供

ツバサ広業株式会社



シンポジウム

千葉縣護國神社特攻勇士之像慰靈祭
専務理事兼事務局長 石井光政

令和3年5月26日(水) 1100から千葉縣護國神社境内の特攻勇士之像前にて、千葉県出身特攻隊員の慰靈祭が斎行されました。本慰靈祭は、特攻像が奉納された平成23年の5月26日から毎年同日に開催されており、本年度ちょうど10年目に当たります。

本慰靈祭はご案内をすることなく、どのような状況下でも護國神社が斎行して下さいますが、本年はコロナ禍にもかかわらず、忘れずにお集まりくださった8名の方には、心より感謝申し上げますとともに、英霊もさぞお喜びのことと拝察する次第です。

慰靈祭は定刻11時に開始され、肅々かつ厳かに神事が取り行われました。

慰靈祭ののち、社務所において竹中啓悟宮司からご挨拶と共に、現在、神社の移築が進められており、来年の慰靈祭は移設先の神社にて執り行われること、特攻勇士之像の副碑を若い人がじつと読んで、像に向かって深々と首を垂れる姿を良く目にするのお話をいただきました。千葉縣護國神社に特攻像を奉納して良かったとしみじみと思いました。

関係の皆様改めて感謝申し上げますとともに、他の護國神社への奉納も引き続き力を入れていきたいと感じた次第です。千葉縣護國神社への奉納時の記事は、会報88号(平成23年8月号)に詳しいですが、ここでは再度、副碑の文章を掲示したいと思います。

千葉県特攻勇士顕彰碑

「わが祖国日本は、昭和十六〜二十年、米英支ソ蘭豪と大東亜戦争を戦った。自国の安泰と、欧米の植民地支配からアジアを開放するためだった。戦いは連戦連勝、南太平洋、インド洋まで制圧したが、物資の補給乏しく、比島から沖繩と敵の侵攻を許した。

この時一機一艇で一艦に体当りする歴史に例のない必死の特攻戦法が採られた。貧しくとも誇り高い民族の苦渋の選択だった。二十歳前後の若者の死への旅立ちを国民は合掌して見送った。その勇姿を此処に置く。敗戦国に育ち歴史を絶たれた現代の人よ、命に代えて何を守ろうとしたのかこの像に問い続けて欲しい。戦後同二十六年五月三日連合軍最高司令官マッカーサー元帥が米上院軍事外交合同委員会で日本の戦は自衛のためであったと証言し米報道機関が全米に発信した。日本国民よこの事実を銘記せよ。」



特攻勇士之像



護國神社入り口の門柱（これも今年いっぱい）



竹中宮司による玉ぐし奉奠



現在の本殿
（解体の清祓は令和4年3月中旬。
新本殿の清祓は令和4年2月上旬
予定）



新護國神社模型（入口より望む）

2106 多田野語録

「汝の足下を掘れ、そこに泉湧く」

会員 多田野 弘

表題は、物事の本質・真理は外にはなく、自己自身の内に求めよという意味である。それには「気づく」ことが大事で、気づきによって考えが深まり、行動が変わり、その人の生き方が変わる。つまり、人間は気づくことによってのみ、自分を変えることができる。

私たちは誰もが、自分をよくし生かしたいと思う。しかし、自分の足下を見ずに、「時間が無い」「合理的でない」「周りが悪い」などといった言い訳をして中途半端で投げ出してしまふ。責任を転化してその場を凌ぎ、自分を合理化してしまいがちである。

先哲は「最も知っていないなければならぬのに、最も分かっているのが自分のことである」と述べている。私たちは、自分という人間がどういふものかが分かっていないのではないか。本当の自分は、「気づく」ことよってしか知ることができない。人は、心と身体（肉体）と魂で構成されているが、心は生れてから言葉を覚え、言葉を組み合わせるよ

うになり、自分が作ったものである。心は魂の道具として、また日常生活を営むための、知識、記憶、指向、感覚、感情の機能を備えている。しかし合理的にか考えられない欠点があり、コロコロ変わるからあてにはできない。

身体は最初、私達の父母によって準備され、大自然の摂理により生命を与えられて、この世に人間として生まれたのである、身体は、心と魂の容器であって、真の自己ではない。死滅すると元素「土」に戻る。生命には、宇宙の意志を帯びた魂が含まれている。だから絶大な力が備わっているのだが、色も形もないためその存在を証明できない。しかし、「魂は肉体に宿り、心と身体を支配し・統御する」といわれ、魂こそが真の自己だといえる。

私にも生涯を変えさせた「気づき」が何度かあった。それは、一途に取り組みどうにもならないと諦めた瞬間、脳が解放され「無心」になっていた時に多かつた。脳が解放される状態とは、何か大きな緊張が解かれた瞬間である。自分を変えた最大の「気づき」は、3年間過ごした南方の戦場であった。死を免れない戦況下、国のため潔く一命を捨てようと死

を受け入れた。すると、忽ち心が解放され、勇気が湧くとともに、自分が魂の存在であることに気づかされたのである

また「無心」の状態とは、我を忘れて没頭する時やいつものコースをジョギングする単調な動きを繰り返していた時であった。リラックスや「無心」の時「気づき」易いのは、その環境が脳の抑制を解き、脳内に空白がつけられるからである。脳が空白にならない限り「気づき」は生まれない。フランスのポアンカレは「気づきとは、突如、天啓が降ったかのように考えが開けてくるものである。いくら努力しても好結果は得られないと諦めて、一見途方もない見当はずれをしていたかのような気がする幾日かが続いた後でなければ、突然の靈感は決して下つてこない。」と述べている。

「気づき」は自分を知ろう、与えられた命を活かそうと一途に打ち込むことから生まれ、人生をつくり変える。さらに、その新しい考えや素晴らしいアイデアは、創造の核となる。私たちの生き方を変え、幸せにするとともに、社会貢献の存在にするのではないだろうか。

私の「戦車特攻」

理事 久納 雄二

一 はじめに
 顕彰会の理事就任にあたり、事務局長は、私が陸上自衛隊の機甲科OBと知った上で、こう述べた。

「戦車特攻もあるよ・・・」

私は、初めて聞く「戦車特攻」という用語に衝撃を覚えた。周りの現役及びOB自衛官にも「戦車特攻」について尋ねてみたが、知っている者は、誰も居なかった。私は安堵感と同時に疑問も抱いたのである。

唯一人、即座にイリサンに言及した者がいた。彼は、私の知人で一般の方だが、イリサンの戦闘で日本軍の戦車がM4に体当たりした様相を、ジオラマ模型で再現し、プレゼントしてくれた。私は、彼の戦車に関する造詣の深さに、改めて驚愕し、情報源にも注目したのである。

爾来私は、顕彰会の活動に触れながら、史料の入手に、有力な支援を得て、手探りの搜索を開始した。

二 「戦車特攻」の起源

誰が、いつ頃から「戦車特攻」という用語を使い始めたのだろうか。

ベースとなる史料は、本顕彰会発刊の「特別攻撃隊全史」第四章及び顕彰会会

イリサンのジオラマ模型



報「特攻」第三号と第十三号における「イリサンの戦車特攻」である。

なお、顕彰会の史料は、『戦車第十連隊史（昭和六十三年・鹿江武平著）』を多分に引用しているのである。

また、同連隊史には、関係者からの証言、戦闘に参加して生還した方々の手記が記載され、『ルソンに生きた十七歳（昭和五十六年・中山誉雄著）』からも

引用されている。

中山誉雄氏は、戦車第十連隊第五中隊に所属し、フィリピンでイリサンと日本人墓地の戦闘の双方に参加して生還されているので、著書の内容は生々しくかつ信憑性が高い。これらの史料が発刊されインターネットで紹介された事により「戦車特攻」は、知る人ぞ知る存在となっていくのである。

他方、『戦史叢書捷号陸軍作戦（2）ルソン決戦（昭和四十七年・防衛庁防衛研究所戦史室）』には、「・・・イリサン隘路において敵大型戦車に頭突きを加えて同地を死守した」となっている。公刊戦史叢書では「頭突き」という、特異な表現になっているのだ。そこには、何か特別な理由がありそうである。

イリサン以外の戦闘で「戦車特攻」と表現されている著作物を、何点か見出すことができたので、その一部を紹介する。

『サクラサクラ（昭和四十二年・船坂弘著）』の『水際撃滅戦』において、「・・・戦車に爆雷をつけたまま敵M4戦車に体当たりして自爆した。特攻戦車である。」

また『人物戦車隊物語 鋼鉄のエース列伝（昭和五十七年市ノ瀬忠国著）』には、ルソン島における重美支隊の夜間反撃を「戦車特攻ともいふべきもの」と記載されている。残念なのは、これらの著作物

からは、「戦車特攻」の背景や様相を伺うことができないことである。

以上から推測すると、戦時中は、現地
の兵士らが、戦車による肉薄攻撃等での
戦い振りを「戦車特攻」と呼称していた
のであろう。また、フイリピンでは昭和
二十年には、既に「航空特攻」が行われ

ており、航空機を戦車に置き換えて「戦
車特攻」と呼称されるようになったとも
考えられる。終戦後は、中山氏や生還者
らによる講演活動で体験談が語られ、ま
た各種の著作物で紹介されて、広く世間
に知られるところとなったのであろう。

「誰が」「いつ頃から」に対する、私の
回答は、これが限界である。

私は「戦車特攻」という用語だけにな
く、その実相を著わしている点から『ル
ソンに生きた十七歳』に着目した。本書
は、元陸軍少年戦車兵学校同窓生会若獅
子会により、昭和五十六年に自費出版さ
れた。その後、中山氏の語り部としての
活動が後世に伝搬し、平成二十一年の再
販に繋がっているのである。

現在では、ユーチューブでアニメ化さ
れた「イリサンの戦車特攻」を鑑賞する
ことができる。

三 「特攻」と「戦車特攻」

「特攻」は、戦時中に制度が確立され、
日本人全体の中で共有され神聖化されて

いた。

他方、突撃、肉薄、斬り込み、挺進攻
撃等は、決死の行動とはいえ、通常の戦
闘行動として、「特攻」とは一線を画し
ている。厳密に言えば、「特攻」と呼称
するためには一定の要件が必要なのであ
る。

いかなる戦例であろうと、それが「特
攻」であるか否かは、制度の要件に照ら
して律せられる事が本筋であり、そうす
ることが「特攻」の権威にも繋がる。

しかし、制度の要件に厳密に合致しな
くても、様々な理由で埋もれていた戦例
が、後世の評価等により「特攻」とされ
ても良いのではないだろうか。顕彰会に
よる「準特別攻撃」もその例である。

「戦車特攻」を見てみよう。

鹿江武平氏は、戦車十連隊史の第二十
四章「戦車特攻と遊就館展示について」
で次のように述べている。

「イリサンの戦車特攻について、当時
感状が授与されているか調べたが、その
事実に接することはできなかつた。感状
が出ていないのなら、せめてその資料を
遊就館に展示して、その遺勲を後世に残
したいと考えた」

一方、『日本の機甲六十年』（昭和六
十年・機甲会編）によれば、「壮烈鬼
神も泣かしむる戦車の特攻である。その

武勲に対し山下方面軍司令官から感状が
授与された」と記載されている。

このように、感状の授与には諸説ある
が、その功績が全軍に布告された事実は
見出せない。また、散華された九名が特
別昇任した事実も伺えない。

現在、イリサンで散華された九名の英
名は「特攻戦士」として世田谷観音に奉
蔵されているのである。その経緯は次の
通りである。

昭和六十二年四月五日靖国神社におい
て第九回特攻隊合同慰霊祭が挙行された。

その時、改装された遊就館に旧陸海軍の
航空、水上、水中などの特攻隊の資料と
ともに、イリサン戦車特攻に関する説明
板、図面、立体模型等が展示された。そ
の後、同年九月十八日、東京都世田谷区
の特攻平和観音に特攻勇士九名の御芳名
を奉納した。同日住職大田賢昭師が読経
し入魂した。『「戦車特攻隊資料の遊就
館展示について」（戦車第十聯隊史）』

戦後、中山誉雄氏らによる講演活動や
著作、鹿江武平氏らによる「尽力により、
「イリサンの戦車特攻」が広く世に周知
され「戦車特攻」が「特攻」としての地
歩を確立していったのであろう。

公刊戦史叢書が、イリサンの戦闘を
「特攻」ではなく、「頭突き」と表現し
たのは、「制度による特攻に付度したた

世田谷観音の特攻平和観音堂
 (堂内に特攻平和観音が安置されている)



特攻平和観音

国のために生還を期することのない特攻
 作戦に志願して若さ命を捧げた特攻隊員
 英名が奉祀されています

陸軍	航空	海軍
陸軍	航空	海軍
一、五五五柱	二、五四八柱	
三、六五五柱	三、五七七柱	
四、二六五柱	四、〇八五柱	
五、二六五柱	五、一七四柱	
六、二六五柱	六、一七八柱	
七、二六五柱		
八、二六五柱		
九、二六五柱		
計	計	計
二、二四四柱	二、〇八五柱	六、四一八柱

観音堂前に戦没者数が表示されている
 赤線が「戦車特攻」戦没者数

め」とするのは、いかがであろうか。
 私は「イリサンの戦車特攻」が「特攻」
 であることに幾分の異論もない。

四 日本陸軍の対戦車戦闘

ここからは、イリサンの戦闘様相を解
 明するために、大東亜戦争時における陸
 軍の対戦車戦闘要領を概観してみる。
 史料や戦記物を見ると随所に「体当た
 り」という表現を見出すことができる。
 果たして「戦車による体当たり」の真相
 はどうだったのだろうか。

日本陸軍においては、戦車は歩兵の直
 協兵器として開発運用され、大東亜戦争
 を戦っていくことになる。

当初、歩兵科の戦車兵であったのが、
 昭和十六年に騎兵監部が廃止されるとと
 もに、陸軍機甲本部が創設され、ここに
 騎兵と一緒にたつた機甲兵が誕生する。

大東亜戦争勃発後のマレー進攻作戦で
 は、日本軍は空地一帯の大機動作戦で大
 戦果を挙げたが、フィリピンにおいて、
 我が戦車砲では、M3戦車の装甲を貫徹
 できなかった。戦車第一連隊は、鹵獲し
 たM3戦車に対する実験射撃を行い、
 「榴弾使用・短射程・集中射」及び「戦
 車中隊は敵に近迫し射撃で撃破できない
 場合は体当たりを敢行し、ついで肉薄攻撃に
 移る」という成果を得たが、体当たりの実験
 は実施していない。【「戦車隊よもやま

物語」(平成三年・寺本弘著)】

この成果は、連隊から師団を通じて機
 甲本部に報告されたに違いない。しかし
 終戦までに、有効な対応策が講じられる
 ことはなかった。

爾後、米軍はM4戦車(M3戦車の改
 良型)を投入し、我が戦車砲による撃破
 は、益々困難になっていった。そのため、
 敵戦車の弱点部位に対するピンポイント
 射撃に勝ち目を見出さざるを得なくなっ
 ていたのである。

歩兵操典(昭和十五年)を見てみよう。
 日本軍の対戦車肉薄攻撃の定義は、「自
 衛ノ爲ニ行ナフ。之ガ爲敵戦車ノ近迫ス
 ルヲ待チテ攻撃スルヲ通常トス。状況ニ
 ヨリ自ラ進ンデ攻撃スルコト在リ」とあ
 る。

歩兵・工兵による肉薄攻撃は、長以下
 二、三名の「肉薄攻撃組」を編成し、複
 数の「肉薄攻撃組」で「肉薄攻撃班」を
 編成する。器材は「戦車地雷」「破甲爆
 雷」「棒地雷」「手投火炎瓶」等であり、
 身をもって敵戦車に肉薄し戦車の弱点部
 位に爆薬を指向する戦法である。

更に工兵のみが用いていた爆薬・爆雷
 を一般部隊の肉薄攻撃要員にも広く使用
 させることで、火力による「点の貫通」
 から「面の破壊」による「爆薬戦闘」と
 呼称される戦闘方式が確立され、戦争終

末期の肉薄攻撃の主流となっていく。

昭和十九年八月には、「対戦車戦闘の参考（戦車関係）」が陸軍機甲本部から発布された。ここでは「1. 戦車単独を以って敵の中・重戦車を攻撃することなく、所要の歩・砲・工兵を戦車に附し

（跨乗兵を含む）て、戦車を核心とする戦闘群を編成するとともに、歩・砲・工兵等諸部隊と混然一体の協同の下に・・・」また「3.・・・戦車を核心とする諸兵の射撃と肉攻の併用により、まず敵の戦車とそれを援護する歩兵等を分離し、次いで敵戦車の機動力を奪い、火力を封じ、最後に乗員を殺傷する・・・」など段階的に撃破することが推奨されている。

【「各国陸軍の教範を読む」田村尚也氏】歩兵と戦車が、相互に支援できないようにする「歩戦分離」は、現代にも通じる基本的な戦法であるが、当時から推奨されていたのである。

陸軍の中核にあつた機甲本部は、「体当たり」について、一切触れていない。認識はしていても、「体当たり」は現地部隊に委ねたのであろう。

陸軍機甲本部が作成した『対戦車戦闘の参考（戦車関係）』の内容を検討する際に、「爆装した戦車による体当たり攻撃」が検討されたとは思えない。自重の二〜三倍の重量を有し、車高も高い敵戦

車に体当たりしても、踏み潰されるか蹴散らされてしまう。近迫できても、体当たりに至るには敵から撃破されないことが必要であり、更に体当たりによって敵戦車を撃破するには、戦車砲に代わる有効な撃破手段が必要なのである。

戦車を爆装化改修し、近迫して車高の高い敵戦車の下に潜り込み、指向性を高めた爆薬を起爆させるのが、最も効果的な戦い方とされたのである。そのため戦車の爆装化改修は、体当たりにより敵戦車を撃破するため必要不可欠となり、「戦車特攻」に具備すべき必須の要件となつたのである。

実際には、体当たりで目的が完全に達成されるわけではなかった。体当たり後に、乗員が肉薄攻撃に移行して、最終の決を与えるのが「戦車特攻」の特筆すべき特徴なのである。

五 「イリサンの戦車特攻」考

史料により、特攻に至る経緯と様相が明らかになっているが、不明な点も多い。戦車を爆装化改修して特攻兵器化する事を発案したのは誰なのか。更に、桜井中隊の編成の上級部隊は、戦車の爆装化改修に関与していたのであろうか。

「戦車第十連隊史」（昭和六十三年）及び「戦車第二師団の記録」（平成八年）を辿ってみた。満州での創隊から歴代指

揮官の指導、フィリピンへの転進、ルソン島での戦闘から戦車師団消滅までに、史料から「戦車改修」「特攻兵器化」に関する内容を見出すことはできなかった。すなわち桜井中隊の戦車改修による爆装化は、フィリピン上陸後に軍司令部直轄となつた以降、桜井中隊長、軍首脳部、肉薄攻撃部隊等関係者らの発案により、具現化したものと推察できる。

技術的な面を見てみよう。

戦車前面へ爆薬を装着するには、戦車の運動性、敵火からの防護、起爆装置、指向性による爆破効果、車外員等と与える影響等を考慮しなければならない。

前面1m先に、左右10kgづつ計20kgの爆薬を固定するには、重量を支える架が必要である。架を戦車前面に装着するには、溶接が必要となる。溶接及び爆弾・起爆装置の補給は、戦車中隊の能力を超えており、補給整備部隊からの支援を要することになる。

当時、桜井中隊は軍司令官の直轄予備隊として、バギオ市街地の防衛を担っていた。戦史叢書によれば、「軍の兵站施設の重点もバギオに置かれていたのである。桜井中隊は、軍兵站部隊と同一地域に所在し、補給整備及び技術支援を受ける最適な環境にあつたといえよう。

また爆装化が、桜井中隊長の発案だつ

たとしても、軍の兵站部隊の支援を受けるには軍司令官の承認と司令部内の手続き処置を経なければならぬ。

私は、軍司令部内で、軍全般の情勢を予見でき、対戦車戦闘に精通した参謀等の要人が、司令官の承諾を得て、戦車の爆装化改修による戦車特攻戦法を提案し、司令官命で兵站部隊に支援させたのだろう、と推察している。

桜井中隊長は、所要の支援を受け、爆装化改修を完了させ、懸命に体当たり訓練及び予行を行っていたに違いない。

軍司令官からの命令発出から決死部隊の編成、恩賜の酒拝受、イリサン地区への移動、肉薄部隊との調整、攻撃発起そして体当たり敢行まで二日程度の時間しかなかった。この至短時間で実行を可能とするには、訓練を含む事前準備の完成が不可欠なのである。

起爆装置はどうだったのだろう。

瞬発かマニュアルかは、体当たり前に跨乗兵を下車させるタイミングや随伴する歩兵・工兵の肉攻班に与える影響を考慮しなければならぬ。史料から推測すれば、手動遠隔の電気雷管を使用したのではないだろうか。瞬発を併用できいたとすれば申し分ないが、余りに感度が良すぎてもリスクが大きい。電気雷管については、昭和十六年に「爆破教範」が

発刊されているので、扱いは問題なかったであろう。

イリサンでの体当たりは、「戦車特攻」として実現した唯一の戦例『「戦車第十連隊史」(昭和六十三年)』であり、その丹羽戦車隊の戦い方は、対戦車肉薄攻撃要領の具現である。私が考える成功の要因は、諸兵種との現地での調整・地形の選定と下り坂の活用・戦車の爆装化と最終チェック、丹羽隊長の敵情判断と攻撃発起の果敢な決心、そして体当たり後の肉薄戦闘への移行である。

特に攻撃発起から体当たりまでの間に、致命的な損害を受けなかった事が大きい。更に二台の戦車が体当たり後に、下車戦闘に移行し、米軍に恐怖心を与えたことが、事後の攻撃続行を躊躇させ、進攻を遅らせる要因となったのであろう。

六 「日本人墓地の戦闘」考

イリサンの戦車特攻五日後の四月二二日、軍参謀から「中隊は直ちに全力を以て、日本人墓地付近に出撃せよ」との軍命令を受領する。

中隊長は爆装化改修した中戦車二両と蒲団爆弾を携行した車外員及び配属歩兵の肉攻班とともに、日本人墓地に進出、射撃陣地を占領して敵を待ち伏せた。日本人墓地は、イリサンの道路に沿った隘路地形とは異なり、開豁した丘陵に広がっ

ていた。

四月二十三日夕刻、二両の戦車特攻班は歩兵の肉攻班を先導し、進出した敵戦車に「必死の攻勢」を開始する。戦車には、必勝を祈願する「南無八幡大菩薩」の旗が掲げられていたという。

突撃開始後、地上で指揮していた中隊長が敵弾に倒れた。一両は前進間に壕に落ち込み行動不能となり、他の一両は中隊長を収容し、後退する敵戦車を追尾したが、敵の至近距離からの射撃を受けて撃破された。

開豁丘陵地形で、敵からの組織的な火網の中では、車外員及び肉攻班も敵に近迫できず、一群となった肉薄攻撃には至らなかったのである。

かくして、「必勝の要訣は肉薄攻撃である」と訓示した中隊長の意思が叶う事はなかった。

七 私の「戦車特攻」

桜井中隊長は、軍直轄予備隊として、イリサン及び日本人墓地において、爆装した改修戦車を駆使し、車外員及び肉攻班とともに、「必死の攻勢」に出た。

この戦車特攻を、私の主観的な尺度をもって「突撃以上」「特攻以下」と整理したい。戦闘の実相からは、三者ともにほぼ同等であり、「以上」「以下」に含まれる同等の概念を活用した整理である。

ここで言う突撃は、通常の攻撃において最終の決を与える「決死の行動の代表」であるが、必ずしも死ぬとは限らない。特攻は、制度に基づく「必死の行動」であり、必ず死ぬのである。

「以上」「以下」は私の整理手法であり、事の優劣、良悪及び上下関係等を意味するものではない。

私は「体当たり」の成否はあったが、桜井中隊の戦闘全体を「桜井中隊の戦車特攻」として捉えたい。

桜井中隊は、ルソン島上陸直後から、軍司令部直轄予備隊となり、バギオ市街地区の防衛に任じながら、他にも緊要な時期と場所に運用されている。

予備隊は指揮官にとつての懐刀であり最後の切り札である。従つて指揮官と同様の情勢認識を以て、予期するすべてを準備し行動することが求められる。また戦車を爆装改修し、特攻兵器として使いこなすためには、周到な訓練と他兵種との綿密な連携・調整に基づく行動を要する。

『戦車第十聯隊史』によれば、渡辺作戦参謀は、司令官から決死戦車隊三両を編成し、敵の突進を阻止しよう命ぜられていた。この措置こそ、バギオ正面二ヶ師団と一ヶ旅団の将来の退却を容易に

し、かつバギオにある兵站諸部隊ならびに負傷者や軍需品の後退を実施しうる唯一の手段だったのである。

命を受け特攻隊として重要な任務に就く丹羽戦車隊は、全員が日の丸の鉢巻きをキリリと締めて、恭しく司令官から恩賜の盃を受けている。司令官の丹羽戦車隊に対する期待の大きさを物語っているといえよう。「必死の特攻」に向かう隊員を前に、彼は何と訓示したのだろうか。当時、司令官の方針は、「決戦を避け長期持久し、敵を比島に牽制抑留すべき」であり、全將兵に対し玉砕を厳しく禁じていたのである。

私は、「任務の重要性」を説き、「必死の攻勢に出よ」との想いを伝え、士気を鼓舞したのであるかと推察している。部隊の規模は小さくても、軍にとつて極めて重要な局面を任されたのだ。これこそ司令官の懐刀である予備隊冥利に尽きるというものである。

武藤参謀長のもとでルソン島での作戦計画の作成に従事した小沼参謀副長は、「敵に比し戦力著しく微弱な部隊は、攻勢（または積極加動行動）以外に生きる道はない」「守勢は、敵の攻勢を誘致し、消極が敵の積極放胆を増大せしめることは、戦場の哲理である」と述べている。

『小沼治夫メモ』

「必死の攻勢」とは、軍全般にとつて「特別」な任務を達成するため、「守勢を戒め、攻勢により任務の完遂に殉ぜよ」であろう。

戦車は、攻勢でも守勢でも柔軟な戦いが可能である。しかし、我が戦車砲に制約を受け、更に防護力も貧弱な戦車で攻勢に出る意義を、全員が熟知していたに違いない。いよいよ決行の時が来たのである。体当たりも辞さない戦い振りを披露する舞台は整えられたのだ。

敵戦車の撃破にあたり、特攻か否かを左右する決定的な要因は、「必死」ではない。発令する立場からは、その攻撃に「特攻」としての「特別な意味」を持たせることであり、受領する側は、「特別な意味」を受け入れることではないだろうか。

鹿江武平氏は、『戦車第十連隊史』の中で、「弱小の我が戦車が、巨大な米軍M4戦車に対し、爆薬を前部に装着して体当たりした。これは日本陸軍戦車隊にとつて初めてのことであり、またこれが最後のものとなった。」と述べている。

最後に、当時に想いを致し総括したい。私の「戦車特攻」は「戦車を特攻兵器として改修・運用し、戦車乗員及び車外

員が一群となって、命ある限り敵戦車への攻撃を執行する、必死で極めて高邁な「戦法」であり、その具備すべき要件と実施要領は次のとおりである。

- ① 軍司令官等から命令によって選抜された兵士による「必死」の攻撃である。敵戦車への体当たりが目的ではなく、敵戦車の撃破及び乗員の殺傷が究極目的である
- ② 体当たりを予期し、体当たり効果を増大・補完させるため、戦車を爆装化改修する
- ③ 戦車による単独の戦法ではなく、歩・工兵との諸兵協同による対戦車攻撃戦法の一環として実施する
- ④ 戦車には車外員を跨乗させ、また随伴する歩・工兵を先導して敵に近接し、肉薄後は跨乗兵を下車させ、歩・工兵と混然一体となり一戦鬪群として敵戦車への攻撃を行う
- ⑤ 戦車は射撃により跨乗兵の行動を支援し跨乗兵は戦車射撃効果を利用して敵戦車に肉薄し、最後は敵戦車に群がり携行爆薬や個人兵器により敵乗員を殺傷する
- ⑥ 体当たりを敢行する場合や戦車が損傷を受けた場合であっても、戦車乗員は下車して歩・工兵及び車外員と一体となって攻撃を続行する

⑦ 散華した兵士には、特別な地位・処遇が与えられ更に全軍に布告される。発令者と受領者の双方にとって「特別」の意味がなければならぬ。

六 おわりに
昭和六十二年四月、靖国神社で第九回特攻隊合同慰霊祭が挙行され、改装された遊就館にてイリサン戦車特攻の資料が展示された。

同年八月、私は当時市ヶ谷駐屯地に所在した陸上自衛隊幹部学校（現教育訓練研究本部教育部・目黒）を卒業し、同じく当時三宿駐屯地に所在していた防衛庁技術研究本部陸上開発官付（現装備庁陸上装備開発官・市ヶ谷）に配置され、TKX（現九〇式戦車）とTKXX（現一〇式戦車）の開発担当となった。

九月、世田谷の特攻平和観音にイリサンで散華された特攻戦士九名の英名が奉納され、読経して入魂されたのである。三宿駐屯地と世田谷観音は目と鼻の先に位置する。私は、同時期に斯様な行事が執り行われているとは露とも知らず、能天気な若輩だったわけである。

更に、私は約三十年前から現在に至るまで世田谷区に居住しており、「灯台下暗し」とは、このことを言うのだろう。

このような縁があったにも関わらず、これまで世田谷観音と戦車特攻に出会え

なかつたのは、ひとえに私の怠慢としか言いようがない。時間はかかったが、顕彰会との出会いが、私を両者に引き合わせてくれたのである。現在では、定期的にお世話になつてゐる自衛隊中央病院への道すがら、また気が向いた時に、世田谷観音を訪れ、桜井中隊長はじめ散華された隊員を偲び、戦鬪様相を想起しながら参拝させて戴いている。

戦車の開発にあたり、その特性である火力・機動力・防護力をどのようにトレードオフするかは国によって異なる。ただし火力が第一優先であることは共通しており、戦車を運用する機甲兵の願いでもある。

「必死の攻勢に出よ」の命を受け、体当たりを予期し、例え我が戦車が破壊されても、車外員や肉攻兵とともに肉薄攻撃に移行し、一命ある限り戦い続けるのが「戦車特攻」の姿である。

その様相をイメージする時、私はこれまで戦車特攻と出会えなかつたことに、忸怩たる思いを抱き続けながら、今後も参拝させていただきたいと思つてゐる。

最後になつたが、私の親愛なる知人から多大な御支援を戴いた。ここに謹んで御礼を申し上げる。

田中賢一さんの三回忌と伝承
会員 大久保 通則

① まえがき

田中賢一さん（陸士52期）は、本会報「特攻」の編集長を始めとして当会の発展のために献身的な活動をされたとお聞きしております。そして、惜しまれながら令和元年7月に、101歳で鬼籍に入られました。会報の編集長としては、平成2〜19年までに、合計60報（第11〜70号）の出版に尽力され、その重責を果たされました。さらに、その後も気骨ある寄稿をされ、多くの人々の心に残っていると感じております。

小生は、戦後60年を迎えた平成17年に、当会に入会させて頂きました。紹介者は、田中さんとお仲間の方々は、田中さんを「先輩、先生」と呼びばれていたと思えますが、田中さんとほぼ同じ年代において戦時研究を遂行され、日本大学での教育と研究の道を究められた小生の恩師から、先達の最高の呼び方は「さん」であるとの教えがありました。故に、「田中さん」と呼びさせて頂くことをご容赦願います。

本稿は、口伝が主体であり、小生の勘違い等はお許しください。正確なことは、衣笠陽雄様が執筆された「特攻、第127号、21-22頁…追悼田中賢一先生」を参考とさせていただきます。小生は、田中さんがご逝去されたことを、この衣笠様からの記事を拝読して知り、無常の念にかられました。さらに、衣笠様は、YouTubeの左記URLで田中さんを偲んでおり、小生も感慨深い気持ちを持ちました。

【<https://www.youtube.com/watch?v=0bXZCXyXRQ>】
一方、次のURLから奥本康大様が、田中さんに関する記事を左記のブログとして発信されておられます。
【<https://ameblo.jp/sorano-shinpei/entry-12504412261.html>】

本稿では、田中さんの三回忌である令和3年辛丑における新茶の季節に筆をとり承「思い入れる」

② 騎兵聯隊跡地での出会いと最初の伝承
田中さんと小生の出会いは、平成17年2月初午の頃でありました。場所は日本大学生産工学部津田沼キャンパス（千葉県習志野市）であります。田中さんとお

仲間の皆様が、キャンパスの西側に鎮座されている、お稲荷さんに「お塩」を供えられていたことを回想いたします。この場所には小公園があり、軍馬の為の石の容器があり、薄氷が凍り付いていました。このキャンパスは、騎兵第14聯隊の跡地であります。なお、その隣には、東邦大学習志野キャンパスがあり、騎兵第13聯隊の跡地から変遷しています。「日本大学生産工学部だより第5号、3頁」に掲載された、騎兵聯隊正門前の軍馬と将校の写真を見れば、話が始まりました。そして田中さんは、陸軍の第一挺進戦車隊長として終戦を迎えられたとお聞きしました。さらに、本土決戦も覚悟されたと思えます。お仲間の方々からは、戦後の田中さんは、陸上自衛隊空挺団の先達であるとお聞きしました。田中さんは、軍馬、戦車、落下傘の時代変遷を駆け抜けてこられました。

田中さんは、この騎兵14聯隊の地は、昭和8年に新しく編成された戦車2聯隊が使用することになった旨を自筆のメモとして小生に伝えて下さいました。写真1（次頁）は、田中さんが来校された日本大学生産工学部の正門の桜です。さて、田中さんは、この地で活躍された陸軍騎



写真2 「秋山好古顕彰」



写真1 日大生産工学部正門前の桜

兵第一旅団長の秋山好古大将の話を読みました。その要諦は、「かつてありしものを思い入れて、正しく考えそして伝承する。」と解釈いたしました。写真2は、現在の大久保商店街の薬師寺の一角にある「秋山好古顕彰碑」であり、この前を通るとき田中さんとの交流が思い出されます。そして、田中さんから賜った最初の伝承は「思い入れる」と記憶にありました。すなわち、先人の佇まいを学び、よく自分なりに正しい考え方をし、それを次世代に生かすことであり、「守・破・離」と類似するものと思いました。

③ 静岡県人としての交流と二番目の伝承「縁」

日本大学に奉職していた小生の溶接工学研究室で、故郷の静岡茶を飲んで頂いた日々が走馬灯のように浮かびます。その時、田中さんの編集された記事の話をたくさん拝聴しましたが、「旧日本軍」や「自衛隊」などの守秘義務についてかなり留意されているお姿に関心いたしました。そこでは、「戦車などの防弾性鋼板」などの技術史や「大久保町の歴史と御用商人」などのお話が脳裏に浮かんできます。「人は話してみなければ、わかり得ない。」との普遍的なことがあります。そして田中さんと小生は同じ静岡県人であること、自宅がかなり近くであること、年齢が30歳ほど離れていることなどを共有して、静岡茶のおかげで話が弾みました。写真3(次頁)は、田中さんとお話をさせてもらった時の資料の一部です。さらに、静岡茶から小生の父の話にとびました。その後、約一週間の間において、小生の溶接研究室を訪ねて下さいました。持参された封筒の中に、父の軍歴が綴られていました。父の履歴の概要には、昭和17年に帯広の第63飛行場大隊長を拝命して、その後昭和20年9月に「待命」を受けて静岡に帰還したことが記録されていきました。そして、父の任官した昭和8年は、前述したように戦車第2聯隊がこの日本大学の地で活動を始めた時と同じであることを力説されておられました。この話の中で、小生の未熟さ故に田中さんの話の中のキーワード(昭和8年、戦車第2聯隊、日大キャンパスの真意が解らずにいました。その後、月日がたち、父の戦友の皆様が生前に実家を訪ねてくれたことや、平成元年の雨の日の葬儀に参列して下さったことなどを思い出し、その時代の先達の佇まいに触れることが出来ました。そして、人(軍歴)、時(時代)、土地(場所)の縁があることに気づいた次第であります。こ

人であること、自宅がかなり近くであること、年齢が30歳ほど離れていることなどを共有して、静岡茶のおかげで話が弾みました。写真3(次頁)は、田中さんとお話をさせてもらった時の資料の一部です。さらに、静岡茶から小生の父の話にとびました。その後、約一週間の間において、小生の溶接研究室を訪ねて下さいました。持参された封筒の中に、父の軍歴が綴られていました。父の履歴の概要には、昭和17年に帯広の第63飛行場大隊長を拝命して、その後昭和20年9月に「待命」を受けて静岡に帰還したことが記録されていきました。そして、父の任官した昭和8年は、前述したように戦車第2聯隊がこの日本大学の地で活動を始めた時と同じであることを力説されておられました。この話の中で、小生の未熟さ故に田中さんの話の中のキーワード(昭和8年、戦車第2聯隊、日大キャンパスの真意が解らずにいました。その後、月日がたち、父の戦友の皆様が生前に実家を訪ねてくれたことや、平成元年の雨の日の葬儀に参列して下さったことなどを思い出し、その時代の先達の佇まいに触れることが出来ました。そして、人(軍歴)、時(時代)、土地(場所)の縁があることに気づいた次第であります。こ

写真 3 田中さんとお話をした資料（抜粋）



れより第二の伝承は「縁：人、時、土地」を大事にする事と心に刻みました。

④ 遺品の帰還と三番目の伝承「待つこと」と

平成18年ごろの田中さんは、お足がやや不自由でゆっくりと歩かれていました。そして、日本大学には軽自動車で来校されていたと回想します。ある日、「旧日本兵の遺品、めいの元へ」と題する新聞記事（毎日新聞、平成16年3月13日、

（雑のう）を拾われ、米国に持ち帰り保管していました。霜雪が経ち、米国の方が、お亡くなり直前にして、娘さんに日本に返して欲しいと言いついに召された。その米国の娘さんより大谷教授の弟様に「かばんと帽子」の返還を依頼され、その指揮を大谷教授が取られました。そして厚生労働省や毎日新聞を始めとする関係各位のご協力により、白貝様の姪御さんと連絡が取れ、ご親族に

「かばんと帽子」が返還されました。調査の過程において、白貝様は、比島派遣第8357部隊に所属され、満州からフィリピンに渡った飛行場守備隊であることが判明しました。そして、白貝様の「かばんと帽子」は、59年の歳月と二万キロを超える旅をして日本に帰郷したことになりません。写真4（次頁）に帰郷した遺品を掲載させて頂きます。

平成18年の晩秋に、田中さんからお話を伺っていた、世田谷山観音寺に参拝のために伺いました。ご住職から特攻観音堂の室内で、菅原道熙様が墨の直筆で特攻戦没者のお名前を丁寧に記されていることをお聞きしました。小生は挨拶のみの出会いでありましたが、脳裏には、父の資料から菅原道大陸軍中將のご子息様であるとの確信を持ちました。そして、小生の会話はそこで十分でありました。慰霊及び顕彰活動の原点を拝見し、赤い夕日の輝きが忘れることができな一日となりました。その後、科学技術情報データベースの検索より、菅原道熙先生の研究論文を拝読し、崇高な気持ちを抱きま

さて、令和3年6月に、ご縁があつて、当会の会員である黒川壯之介様との出会いがありました。約3時間にわたり、黒

3版8面）を田中さんに見て頂きました。この新聞のニュースは、当時、生産工学部長を歴任された大谷利勝教授の献身的な活動によるものであり、小生も現場でお手伝いをさせて頂きました。靖国神社の御祭神調書によると、その人のお名前は、白貝 一人様で、昭和20年3月に享年24歳の若さでフィリップスのクラークフィールド飛行場付近で戦死されました。そして米国の方が、戦場で「かばんと帽子」



写真4 長い歳月(59年)を経て日本に帰郷した遺品の「かばんと帽子」

川様のお父様と大叔父様のお話を拝聴しました。そして、その会話のキャッチボールより、田中さんとの回想と重なりました。ここで、遺品の帰郷、菅原道熙様と

の出会い及び黒川壯之介様とのお話より、田中さんからの第三の伝承「待つこと」を気づいた次第であります。

⑤ あとがき

本稿では、田中さんを追悼する目的で筆を取らせて頂きました。そして、関係の皆様へ感謝の念を抱いております。当会専務理事の石井光政様とは、令和3年5月26日に千葉県護国神社で開催された千葉県特攻勇士之像慰霊祭で出会いの機会を得ることが出来ました。そして、田中さんを偲んだ小生の回想の時系列について、ご示唆を頂きました。

時代が遡っての感謝は、溶接工学の教育と研究生生活は、平和の時代のお陰であると考えます。さらに日本大学のキャンパスでの交流は不思議な出会いの連続でした。静岡茶を飲んで頂いた教授の一人に、堀越二郎先生との思い出があります。堀越先生は、零式艦上戦闘機の設計をされ、日本大学では独創的な教育を展開されていました。そして、卒業アルバムには「誠実と勇氣」というメッセージを学生に託されています。さらに、大和田信先生は、三式戦闘機の設計に携わられ、学生に対して、エンジンの冷却がいかに重要であるかを論述されていました。タバコをこよなく好まれたお姿が目には浮

かびます。一方、終戦前後の思い出を語られた笠井芳夫先生を思い出しました。胸のポケットに鉛筆をさしておられ、学問領域が異なる小生に対して、研究と産業界との連携に関してのご指導を賜りました。笠井先生は、田中さんのお近くに生まれ住まわれていました。そして、建築関係の著名な研究者として、リタイア後も大学に出校され、優れた研究を継続されていきました。紫陽花が咲く小雨の日に、小生の自動車に乗っていただき、大学に登校した日がありました。車中で、若い時期にとつもない苦勞をされたことや、研究の醍醐味を回想しておられました。その内容は、山梨航空機関学校や大日本航空株式会社であったことをあとで知りました。このように、田中さんの言われる土地(場所)の縁は不思議なものと思えました。堀越先生、大和田先生、笠井先生はそれぞれの時代を懸命に開拓され、静かに黄泉の国に旅立たれました。さて、小生がご交誼を頂いていた田中さんのお住まいは、新京成線の沿線にあり、小生の散歩道となっています。田中さんからは、「年代を越えて貴重な伝承を賜った」こととなります。ここに、田中さんの三回忌にあたり、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

築城基地五十年史より (其の二)
零戦パイロットの回想

会員 水町博勝

次の回想記は、空母「翔鶴」乗組みから築城基地に転勤して、艦上戦闘機零戦パイロットを育成する教官の回想です。

昭和十八年末築城基地より教官と育成パイロット約七十名は第一航空戦隊空母「瑞鶴」「翔鶴」「瑞鳳」の戦闘隊へ転出、艦隊司令長官小沢治三郎海軍中将が指揮する第一機動艦隊の一翼を担うため南方前線へ向かった。

艦載機の特別な教育訓練の総仕上げは、呉を母港とする航空母艦が築城基地の前面に広がる周防灘を遊弋して、実際の艦を使用した。ミッドウェイ海戦で失ったパイロットの養成は急務、艦載戦闘機搭乗員の練成教育、そして母艦補充搭乗員練成(零戦への機種転換訓練)の為に、此処築城でなければならぬ立地条件も理解できた。

半世紀の回想

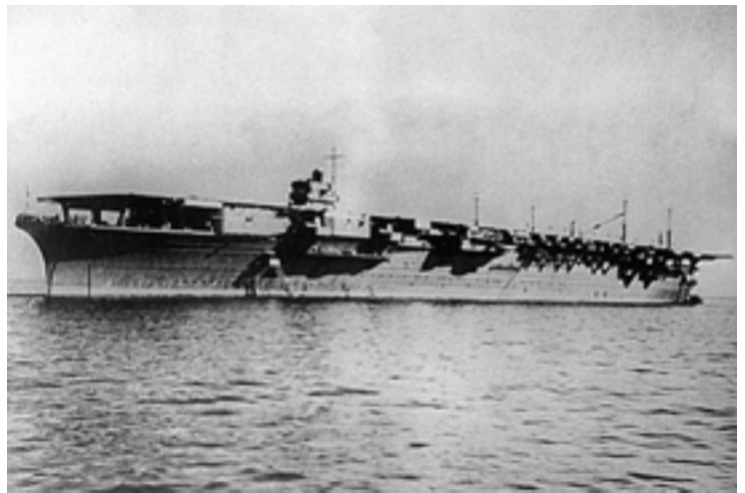
元零戦パイロット

海軍少尉 小平 好直

一 築城空の誕生

転勤命令

「築城海軍航空隊附ヲ命ズ」電報による転勤命令を知らされたのは、ガダルカナルの攻防戦を空から支援し、引き続き



翔鶴型航空母艦

南太平洋の海域で米軍の機動部隊と渡り合い、艦も人も疲労困憊その極みという状態で、母港横須賀軍港に帰投する航空母艦翔鶴の艦内であった

私達は戦闘機搭乗員室でそれぞれ思い思いのことをして寛いでいた。生き残った者全員が築城空附きになったのではなかったが、築城という地名を知っている者は一人も居なかったし、勿論此処に新しい航空隊が出来たことも知らなかった。

さて五十年昔の思い出を順序正しく文字で綴ろうとすると、鮮明に脳裏に焼き付いていることと、記憶が薄れてしまったこととがあつて、点が線にならないもどかしさを覚えるのだが、戦後二度に亘つて厚生省援護室から送付されてきた、私自身の履歴書を基に、記憶を辿ってみたと思う。

激しい戦いを演じて、誰と誰が生き残り、その内の何人が築城空附となったかは定かではないが、築城海軍航空隊は、昭和十七年十月に開庁したものの、実戦部隊を受け入れる設備、特に飛行場が完全でなかった為に、当分の間、築城空富高分遣隊として、宮崎県富高町(現日向市)に設けられた飛行場を使用して、訓練を実施するという応急処置がとられ、横須賀軍港に入港してから数日後に退艦し赴任の途についたのであった。

我々転勤者一同は、横須賀から国鉄を乗り継いで富高に向かったのであるが、何日位かかったのか、又途中ではどの様な旅だったのか全く覚えていないが、基地に入り着任の申告を済ませて初めて海から陸に上がり、仮住いの設備であっても築城空の一員となった実感が湧いてきたことを思い出す。

二 築城空における猛訓練

(一) 富高から築城に移動
富高分遣隊では転入者が揃い次第訓練

が開始されたが、飛行機の数が足りないので群馬県太田市にある中島飛行機製作所や、三重県鈴鹿市の三菱製作所等に、新しい零戦を受領に行くのも大変な仕事であったし、その他資材器材等の調達が、本格的な訓練の開始されたのは、翌十八年四月に築城へ移動してからであった。

四月初旬二十数機の零戦が、今にして思えば小さく四角な、そして土煙の舞い上がる飛行場であったが、新設された飛行場に一番乗りをしたのだという何となくうきうきした、誇らし気な気持ちで降り立ったのである。

近い距離で単なる移動の時には、単座戦闘機の座席後方の胴体の中に、整備員が一人宛乗り込むのが常であった。この時の移動においても例外ではなく、各機に整備員が乗り込んでいたが、この内の一機には箱に入れられた子犬が一匹積まれている。搭乗員が可愛がって飼っていた顔立ちのいい雑種の雌犬であった。誰が付けたか「ゼロ」と命名していた。

隊内における日課の終始には、喇叭による予令が吹鳴されていたが、次第に成長してきたゼロはラッパが鳴りだすと前足を立て、尻を地面に着けた格好で上を向き、悲し気な唸り声をあげていたあの姿が眼に浮かんでくる。

(二) 猛訓練の開始



九五式水偵

富高分遣隊で築城に移動する以前に、前線部隊や母艦に転勤していった仲間もいた。ミッドウェイの戦いからソロモン海峡、ラバウル方面と激しい戦いが続いてきたので、搭乗員の数が極度に減少し、特に母艦経験者の払底が問題となってきた。そこで水上機のパイロットを戦闘機のパイロットに転化させるという方針が打ち出され、築城空において初めてその教育が実施されることになったのである。下駄履機といわれていたフロート付きの水上機は、戦艦や巡洋艦に搭載されていて、艦砲の弾着観測と敵情偵察とが主任務であり、普通はただ単に水偵と呼んでいた。此の九五式水偵という機種は、複座であったが運動性が軽快でありアクロバットができるので、この機種の操縦者は戦闘機に変わるのに好都合であった訳だ。このよう

な水上機からの転換者と、本来の戦闘機乗りとして教育訓練の基礎を学んできた若い人達と、それに戦歴を持ち指導する立場の人が一体となって、編隊飛行・特殊飛行（アクロバット）・単機空戦・編隊飛行・定着訓練（空母に降りる為の基礎訓練）・射撃訓練（洋上に出て曳的機の曳航する吹き流しに接近して弾を打ち込む）等々盛り沢山な訓練を逐次消化し、技倆の向上を図っていた。

(三) 空戦訓練

戦闘機の操縦者は、空戦技倆に長け、射撃の名手でなければならぬ。そしてこれが戦闘機乗りの神髄である訳であり、したがって空戦と射撃の訓練には熱が入り、夢中になってしまつて危険を伴うことがしばしば起こるのだ。

空戦訓練の初期は、単機空戦から始められるが、その又基本となるのが追従運動である。これは教官機の後について同じ操作を繰り返す。七、八十米の間隔を保つて追つてゆく。垂直旋回から宙返り、横転もあれば、急反転もある。

ゆるりとした宙返りの操作が繰り返されたと思つてゐるうちに、前方にいた教官機がいつの間にか自分の後についてくる。これには吃驚してしまふ。戦闘機と戦闘機の空中戦では、相手の後方につくことが必須条件であり、こうした態勢になれば後は照準器を覗いて発射レバー

を握るだけである。

訳の分からない内に後ろについてしま
う、後ろに付かれてしまう。この操作こ
そが海軍戦闘機操縦者の先輩達が編み出
した極意中の極意とされた「ひねりこみ」
と称する特技だったのだ。湾岸戦争でみ
せられたようなハイテクを駆使した近代
戦の感覚からすれば、私の昔語りは一笑
に付されてしまうかも知れない。

こうした訓練を積み重ね編隊空戦へと
移行してゆくのだが、戦闘機の性能が向
上し、その上敵味方相手の交戦相手が増
えてきたので必然的に編隊空戦方式がと
られ、味方同志の攻めと守りの相乗効果
が図られるようになった。

(四) 着艦訓練

航空母艦に乗り込む操縦者は、発・着
艦の出来ることが第一条件である。当時
大型空母といわれた翔鶴級の空母でも、
甲板の長さが二百四十米そこそこのもの
であり、そのうえ艦は常にピッチング、
ローリングを繰り返している。この
のような条件下での発艦・着艦は容易な
ことではなく、当時一回の発・着艦に対
して二円也の危険加俵が支給されていた
点からも危険な操作であることが頷ける
訳である。

着艦するときは、甲板上に四本之至六
本のワイヤーを横に張り、飛行機の胴体



着陸角度を体得するための「着陸練習機」

後部に装着してあるフックをこのワイヤー
にひっかけて停止させるのであるが、そ
のワイヤー両端には錘が付いていて、制
動することにより、衝撃を緩めるメカニ
ズムが施されているのである。

平常の着艦では一機が着くと、甲板両
サイドのポケットに待機している整備員
が飛び出してきて、素早くフックからワ
イヤーを外し、エレベーターの上まで誘
導する、そこでエンジン停止、座席から
パイロットは出るとエレベーターが降下

し航空機は格納庫に納められる。エレベ
ーターは上昇して甲板となる。

この操作の繰り返しで次々に収容され
ていく。これに対して緊急着艦の場合は、
甲板前部の艦橋付近にバリケードが立
てあり、機が着陸するとこのバリケード
をパタンと倒しその上を通って甲板の先
端に向い、順序よく並べてゆく、一機が
バリケードを超えたとすぐ起こし、次の
飛行機が着艦してくる。もしワイヤーに
かからない時はバリケードに直撃して止
まるのだが、修理不可能と判断された機
体はそのまま甲板外舷から海中に投棄す
ることもある。

着艦の最初の訓練は、飛行場に白
い布板で着陸点を決めこの範囲内に毎回
接地できるようにする迄、来る日も来る
日も繰り返し繰り返し練習をする。

そしてその上にまだ厳しい条件が付い
ていて、降下角度が六・五度、地上一米
で三点姿勢落下というものであった。三
点姿勢とは、当時の飛行機はノーズギヤ
ではなく尾輪式であったので地上に停止
している時の状態の姿勢の事であり、地
上一米で落下というのは失速状態にさせ
ることで滑走距離を縮め、更に甲板上で
ワイヤーにかかった時の衝撃を少なくす
る目的のためである。

定着点のすぐ近くには、分隊長はじめ

指導部が椅子を並べてチェック採点しているので、気を抜くことができない。

以上のような基本の操作に合格点をとった者から、本当の母艦に対する訓練が許される。この時の母艦はたしか鳳翔だったと思うが、呉の軍港を基地として予め打ち合わせた時間には周防灘を遊弋し訓練機を受け入れたのだった。

着艦訓練は、今迄飛行場で繰り返し実施した定着訓練の手順を飛行甲板に置き換えて実行すればいい訳であるが、そう理屈通りにできるものではない。

三、隊員の生活

(一) 隊内の居住施設

富高分遣隊では庁舎も兵舎もバラック造りで平屋であったが、築城空は木造建築ながら二階建ての庁舎が一棟と、同じく二階建ての兵舎が二棟、それに浴室、烹炊所等の付帯設備は勿論のこと酒保もあった。

しかしながらテレビもなければラジオもない、隊内の飲酒等は勿論許されていない。夕食後は風呂に入りテールで手紙を書き、またある者は将棋を指したり、碁を打ったりして楽しむがそれも巡検までの限られた時間である。就寝前に当直士官が関係者を従えて隊内を点検して回

ることを「巡検」といい、先導役の先任下士官大きな声で「じゅんけーん」と部署毎に号令をかける。立っている者も卓子についている者も姿勢を正しく咳一つたてない厳粛なそして緊張する一刻である。巡検が終わって間もなく消灯・就寝となるのだが、両者共にラッパの吹鳴があり床の中でこのラッパを聴いていると

哀愁を帯びた然も荘重さも含んだ曲であつて、軍隊に入つて間もない頃には誰でも故郷に思いを馳せ母親の顔を思い浮かべてつい涙がこぼれてしまったものだ。

(二) 嬉しい外出

一週間に一度許される外出がどれだけ楽しかったことか。勿論階級に応じてその回数も違い外泊も許可されているが、現在のような営外居住はなく基本的には隊内居住であつたから妻帯者の下士官でも一日おきに外出するという格好になつていた。そして、独身者の場合は階級に

関係なく又殆ど例外なく下宿をしていた。気心の合う仲間が二人三人時には四人も五人も同じ家に頼んで一週間に一度の外出時に食事を作つて貰い家庭団欒の雰囲気に浸り、お袋の味を思い起こすのだ。外出を許された隊員は、決められた時間に所定の場所に集合して副直士官の服

装点検と外出中の注意を受けた後、隊門迄隊伍を組んで進み、解散・自由行動となる。

汽車に乗る者は駅へ、隊の近辺に下宿している者は下宿に向つて突進する。正に突進である。下宿に着くやいなや軍服を脱いでラフな服装に着替えるのだが、これが何とも言いようもない楽しいものだった。こうした寛いだ服装で畳の上で寝転ぶ、安らぎ、安堵感、文字をもつてこの時の気持ちを表現することは大変難しいが、とにかく頭の中が空っぽになる一刻であつた。

私の同僚達は椎田に下宿を探していた。私もそうであつたが、甲斐、前の両君はその時椎田町の町長古賀繁太郎家に、清末、北條の二人は町議会員笹田春長家にそれぞれ好意に満ちたお世話をしてもらつていた。私は生来厚顔無恥な男であるので、浄土宗西福寺を訪れ御住職西山順照師に懇願して快くお許しを得、築城空に勤中ご厚意に甘えて過ごさせて頂いた。

四、結び

(一) マリアナ沖海戦

富高分遣隊から築城を通しての一年間に厳しい訓練を重ね切磋琢磨してきた仲間には五十人に及ぶ人数だつたと思うが、

逐次転出して私が若い人達十数名と共に岩国基地に創設された六〇一空へ転勤拝命となったのが十八年の歳の瀬を控えての時期であつて、私たちが転出者の殿であつたと思う。

新規の部隊、六〇一空戦闘隊は十九年の一月下旬には零戦による空中移動でシソールに転進、ここで訓練を積み五月には各々瑞鶴と翔鶴に乘組みタウイタウイ泊地に移動した。この泊地に集合した艦艇は、航空母艦九隻を中心として戦艦、巡洋艦、その他合計で七十四隻といわれ日本海軍連合艦隊最後の威容であつた。

この泊地に約一ヶ月間待機し機熟すとか決戦の時が来て、六月十三日一斉に錨をあげマリアナ沖に向つたのである。艦隊は隊列を組んで進む様子を当時は「舳艫相銜む威風堂々」というような形容詞を用いてその情景を描写したものであるが、あの時は本当にそんな気持ちで前後の隊列を眺めていた。

私の乗り組んでいた翔鶴は、私が第一攻撃隊として発進し米軍と空戦を交えている間に、敵潜水艦の魚雷攻撃を受け航行不能やがて沈没。私は敵弾十六発を機体に受け、左の燃料タンクも撃ち抜かれ

てしまったので、前衛部隊の特設空母千代田に着艦し、右タンクのみ燃料を補給してもらい、昼食を食べさせてもらい、翔鶴は駄目だから瑞鶴に降りる様にとの指示を受け発艦した。ところが今度は左脚が収納できない。千代田の甲板で点検してもらったときは発見されなかったのだが、被弾により装置が故障したものと判断し千代田の上を低空で二度通過、今度は右脚を出して着艦を試みたがワイヤーに掛らず二度目は赤旗を振られたので着艦を断念した。片足を出した俣で六十哩後方の本隊まで飛ぶことはできない、どうせ

傷だらけの使い物にならない飛行機だからと着水することに意を決し、随伴駆逐艦「藤波」に報告球を投下して事情を説明し救助を頼んだ。両方の脚を出したままの着水であるから車輪が水に着くと同時に物凄いショックで転覆し水の中に潜ってしまった。

(二) 平和の尊さ

戦後五十年近くの年月が流れ、巷には数限りない戦記物が出版されて戦いの実態は知り尽されているのにお叱りを受けるかも知れないが、私は決して戦争を美化したり、礼讃したり等と

いう意図を以つて筆を進めていないことだけはご理解頂きたい。

築城基地で約九ヶ月練成訓練に励んできた仲間達五十人近い若者が、マリアナ沖海戦その他の戦いで戦死してしまつたし、第二次世界大戦を通じては何百万人という人達が同胞のために尊い犠牲になり、捨て石となつたその結果として、今日の平和が招来されたのだということをも真に理解して欲しい。諄い奴だと非難されるかもしれないが、私は死ぬまでこのことを叫び続ける。

私は昭和十年に海軍に入り、十四年十二月には南支戦線で、九六式艦上戦闘機(九六艦戦)を操縦して柳州・桂林攻撃に参加して空戦の初体験をした。

航空母艦の勤務は前述のとおりであるが、レイテ島の攻防戦には母艦千代田に乘組み攻撃に出た間に千代田は米軍機動部隊の攻撃を受けて沈没してしまつたので、我々攻撃隊はルソン島北端のバリバリー飛行場に降りた。更にまた二十年八月十五日には朝九時ごろ英軍機動部隊を迎え討つべく、濃霧の中を千葉県の茂原基地から飛び上がった。終戦を知らされたのは、福島県郡山の飛行場に降りた午後二時の事であつた。

(三) 十年一昔

終戦になり一時途方にくれたが、生きるために夢中になって働いた。あるときふと過去を振り返って見て気付いたことは、戦後歳月の流れがとても早く感じられ、十年一昔と言うその一つの区切りが飛ぶように過ぎ去っていったことであり、これに引換え戦争に明け暮れたあの十年間とてつもなく長く感じられたことに驚いた次第である。私にしてみれば青春時代の十年間であったのだが、その過去を決して悔いている訳ではない、しかしながら今にして思えば充実した日々であった等と格好のいい言葉でかたづけられる、そんな生易しいものではなく極限状態の連続であったことを平和な日々を送ってみて沁々と感ずるのだ。

築城空で鍛えあつた仲間達、その英霊は現在の日本の平和をきつと喜んでくれているであろうし、見護つてくれているに違いない。

人間同志が殺し合う戦争は、未来永劫起こしてはならない。世の中は進歩と共に愚かさも又進歩するといわれる。

国民一人一人が英知を持って、現在の体制「専守防衛」を貫かねばならないと思つている。

小平氏略歴

昭和十年 横須賀海兵団入団

艦載航空機搭乗員として各地を転戦

零戦パイロットで終戦を迎え

三十年航空自衛隊入隊

四十三年空自退官二等空佐

五十三年行橋相互(株)勤務

筆者追記

マリアナ沖海戦時の第一機動艦隊には二つの航空戦隊(空母群)があり、前述の第一航空戦隊(十九年三月に瑞鳳に代わり大鳳を編入)ともう一方の第三航空戦隊は、改装空母群「千歳」「千代田」(空母不足により昭和十八年に水上機母艦兼特殊潜航艇母艦を空母に改装)「瑞鳳」の三艦です。

小平氏乗艦の「翔鶴」に搭載されていた航空機は、零戦艦上戦闘機三十四機、天山艦上攻撃機十二機(内三機偵察)、彗星艦上爆撃機十八機、二式艦上偵察機(彗星の偵察機型)十機、九九式艦上爆撃機三機、計七十七機です。

「翔鶴」の戦歴は真珠湾攻撃に始まり、昭和十七年間、ラバウル攻略戦、セイロン沖海戦、珊瑚海海戦では世界初の空母対空母の戦い、その後呉で修理、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦と戦つてきた。

た。

マリアナ沖海戦は史上最大の機動部隊決戦と言われ、絶対防衛圏死守の海軍「あ号作戦」の発動です。水上戦闘は昭和十九年六月十九〜二十日の間、日本海軍空母九隻、米軍十五隻、搭載航空機は日本海軍の航空機四九八機に対し、米軍航空機八九一機、戦闘機は日本海軍零戦戦闘機二二五機、米軍F6Fヘルキャット四四三機等数において米軍は優勢でした。その上米軍はリーダーピケット艦を前面に、中央指揮所CICに情報を集約し、無線通話で迎撃機に情報を伝える要撃管制を行っていました。

昭和十九年六月十九日『翔鶴』は敵潜水艦の魚雷を受け沈没、空母を護衛する駆逐艦の総数は日本海軍二十隻、米軍六十七隻であつて、米軍空母には二倍以上の護衛艦がいて、その不足が一因とも言われています。日本軍は空母三隻、航空機三七八機を失い「あ号作戦」は失敗、東條内閣は責任を取り総辞職しました。

小平氏が次に乗組の母艦「千代田」はレイテ沖海戦に参戦、米機動部隊の攻撃を受け昭和十九年十月二十五日沈没し、参加した他二隻の空母共にすべてを失つた。同日フィリピンの地上基地マバラ

カッタから関大尉率いる「敷島隊」零戦六機は、米護衛空母「サンティ」「スワニー」に体当たり航空特攻による戦果を挙げて、海軍の航空特攻は本格化していった。

築城基地五十年史より(其の四)
九三式中等練習機特攻の回想

会員 水町博勝

教育に携わった飛行隊長から特攻隊の飛行隊長としての回想です。内地の築城基地と云えども戦局に影響している。昭和十九年十二月大本営はレイテ決戦を断

念、昭和二十年一月連合艦隊は、比島における特攻を打ち切った。次の本州南方作戦の為、二月十日鹿児島鹿屋基地に第五航空艦隊の司令部を設け、宇垣中将を司令官とした。築城基地も二月二十日に九三式中等練習機(赤トンボ)による特別攻撃隊を編成。五月五日練習航空隊を解散し、第五航空艦隊第十二航空戦隊(徳島、高知、観音寺、西條、岩国、築城、博多、諫早、光州、釜山、天草、福山各海軍航空隊)に編入し、特攻作戦の指揮下になった。赤トンボで出来ることは低高度・夜陰に乗じて海岸線に着上陸する敵に攻撃する事であった。その飛行隊長のある決断と部下の想い出です。

若しあの時に 悠久の雲に思う

築城海軍航空隊飛行隊長

元海軍大尉 西田三郎

「築城海軍航空隊ハ可動機全機ヲモツテ本土四国南岸ニ上陸セントスル敵艦船ソノ他ニ対シ、特攻攻撃ヲ決行スベシ」これは発令寸前において永久に発令されないままに終わったものの、この想定のもとに既に二十年二月以降、厳しい訓練を続けてきた吾々にとっては、既に覚悟されたものであった。

あれからもう四十八年 終戦の詔勅を受けた夜半、昭和二十年八月十六日の未明でした。佐伯基地の稼働全機は、エンジン全開、翼を振るわせて試運転も完了「いざ出撃」の命令を今や遅しと待ち構えていました。『土佐沖に火柱五本確認』の情報が入り乱れるなかで『征くべし』との気概は、どう止めようものな

松本部隊出撃の報を受けるや、すぐさま大分基地にある五航艦司令部と連絡をとりました。それは特攻編成の際、築城、日出生台、佐伯と展開しても「いざ出撃」の時は私が出発するということを願い出たからでした。その時私の脳裏には、かつて佐伯基地に飛んだとき、佐伯基地の大沼基地飛行隊長が「出撃の際は俺が指揮をとる」と言うのを「馬鹿を言うな！松本部隊横山隊は築城空所属だ。出撃する以上、飛行隊長の俺が先導する！」と隠山の防空壕の中で口論した場面が鮮明に浮かびました。まして瞬間的に「終戦の詔勅が下った今犬死にさせてはならぬ」という思いが胸をしめつけました。

私は日頃から搭乗員の連中に「常に冷静であれ、死ぬときはさり気なく征け」ということを言って参りましたものの、あの当夜の大混乱の中で若かった私は少なからず迷い、判断に苦しみましたが、結論は「出発待て！」を決断したのです。

佐伯の隊員は、小野大尉、横山中尉の指揮下にありましたけれども、飛行機乗りとして一から育てた特攻隊員の指導をしたのも私である限り、私は生命を賭して、この際出撃を諦めさせ、抑えるべきだと決断し、神に祈る思いで誤報をであ

当時築城原隊にあった私は、佐伯基地

満ちていました。

ることを信じ『待つべきだ』と五航艦参謀に具申したのでした。

そうこうする内に、情報は誤報であることが判り、出撃命令は取り消されました。あの混乱の中のこと、若し何かの行き違いで命令が誤って伝えられたり、或いは上官が誤った判断や冷静さを欠いた下令をしていたら・・・思うと今だにゾツとします。

人生には度々決断を迫られることがあ



昭和十九年当時の築城基地の様子

り、お互いの歩んで来た人生にも数々の事象があった事と思えますが、私は当時を思い起こすたびに『若し、あのときに』を強烈な印象として思い出します。

雲の流れは止まることなく、悠久の昔から二十一世紀への未来へと動きを形造してまいります。

あの流れのひとときのなかに、こんな烈しい時代があったことを知らぬげに。

西田氏略歴

昭和十五年 第七期海軍航空予備学生

十六〜十七年 霞ヶ浦航空隊教官

十七〜二十年 三三空、三五空

九五六空、スラバヤ、

マカッサル、ラポール

五十四年〜システムプロセッサー(株)

創業 代表取締役

佐伯基地の想い出

築城海軍航空隊佐伯基地派遣

神風特攻隊第二菊水隊

海軍少尉 倉掛 喜一

終戦前後の色々な想い出は、四十八年を経た今日、記憶の大部分が薄らいでおりますが、やはり終戦の翌朝、敵機動部隊土佐沖に現れるの誤報によって発せら

れた特攻命令は、今日に至るも鮮烈な印象を残しております。当時の日記に、辞

世の句？のつもりだったと思いますが、三首の和歌が書かれていました。

・土佐沖に機動部隊を発見す

・殉国の秋いまや到れり

・二年の緑は浅き父祖の国に

別れを告げて出撃を待つ

・紺碧の佐伯の海を飛び立ちて

・土佐沖の空鮮血に染めん

顧みますと私共の青春の原点でありました築城海軍航空隊では、戦争そのものは是非は兎も角、私共に課せられた任務は、これを全力で遂行したのであります

が、実は手抜きをすると命に係わる最も危険な搭乗員であった事、正に生と死の背中合わせの連日の猛訓練を生き抜いた青春を共有したことが、私共の連帯感を

より強いものにしたのではないのでしょうか。今にして思えば誠に貴重な体験であったと思えます。かつて風雲急を告げる国

難に立ち上がった吾々臨時雇いが、本職そのこのけの大活躍をした特攻作戦では、約九十パーセントが我々予備士官乃至は

甲飛、乙飛の若手志願兵であるという記録が残っております。

指揮官は十三期、十四期、一期予備生徒、海兵七十三期でありまして、特攻機

を包む曳痕弾の火線、霰のように乱射す

る敵火砲の真つ只中を初陣の若きパイロットが歯を喰いしぼり、少し前屈みの姿勢で操縦桿をしつかり握りスロットルを全開して突入する健気にも又神々しい姿を思い浮かべるとき、英靈に暫く黙禱を捧げました。

吾々佐伯移駐組が何時築城空を出発したのか、当時の記憶が消滅しており定かでないが、故今井分隊長の記憶から推測しますと、夜間飛行の最終段階である単独航法訓練をした記憶があります。

次に広末と言う山の中の宿舎は知りませんが、飛行場から全員が農家や旅館、お寺に移住した時点では吾々二十余名？が椎田の雲龍壮に宿泊、蚤の大群に襲われて睡眠をとるのも容易でなかった記憶があります。

以上のような訳で吾々佐伯組は六月中旬に移駐した様に思います。佐伯空での訓練内容は、昼間の二十五番（二百五十キロ爆弾）を積載しての離着陸訓練、高度二〇〇〇メートル位からの突入訓練、海上での超低空飛行訓練等を記憶しております。

私共、松本少佐率いる佐伯組は、終戦の翌朝出撃命令が発せられ、遺書と遺品を司令部に預託、出撃順位の決定や飛行

隊員の時計の時刻合わせ、佐伯空司令の訓辞、清酒の乾杯等があり、飛行場の列線に集まった中練には二十五番の装着を終え整備員が試運転をしております。排気音が響いております。正午近くになつて特攻作戦中止の命令が下り所謂「幻の中練特攻」となった次第です。後日、西田隊長の裏話では、大分空の五航艦司令部とのやり取りで四国沖敵機動部隊発見の報は、誤報であることを確認した為、即時攻撃中止を申し入れたとありますが、若しこの時隊長の迅速適切な判断に依る処置がなかったら、大分空の宇垣司令官は前日部下と共に沖繩に突入されており、指揮系統の混乱の最中にあつては、恐らく作戦は遂行されたと思います。

吾々特攻隊員は暗夜の四国海岸に到着することなく、豊後水道か足摺岬当たりの海中に墜落していたと思います。西田隊長が最後まで隊員の安否を確かめられ、築城空からの派遣隊員が出撃する時は、自ら先頭に立つ事を要請されていたとのことです。夜間飛行で格納庫に激突して殉職した同期仙代候補生の血塗れの遺体を格納庫の屋根から背負つて降りてこられた隊長の姿を今日にいたるもまざまざと想い浮かべることが出来ます。

「指揮官は常に兵の先頭に立つ」帝国海軍の伝統を自ら実行された西田隊長に衷心から謝意を捧げるものであります。倉掛氏略歴
十八年十二月学徒出陣で相ノ浦入団
一期予備生徒、三重空、築城空
二十年六月特攻要員、佐伯基地展開
建築金物販売に転業

特攻志願
築城海軍航空隊
神風特別航空隊菊水隊
海軍少尉 山本 隆則

予備士官は総て特攻隊になったわけではない。特攻隊員は各飛行隊で募集の形式をとっていた。命令でなく、志願形式である。私が特攻志願したのは昭和二十年二月十八日だった。次々と特攻機が出撃し、その次の特攻隊員がほしいところである。

築城海軍航空隊で、戦闘機搭乗員百数十名に「講堂に生まれ」と命令が出た。西田三郎飛行隊長は、戦局が極めて厳しさを増している実情を訴えた。「只今から、貴様達を中心として特攻隊を編成する！」

講堂は一瞬シーンと静まり返った。戦闘機搭乗員は固唾を飲んだ。西田隊長の

言葉が覆いかぶさってきた。「搭乗する兵器は軍の機密に属することだから、今はつきり云えないが、特攻兵器であることに間違いはない。ひとたび出撃すれば、絶対に生きて帰ることは出来ない」と覚悟してもらわねばならぬ。断わっておくが、ただ単に特攻隊員になることだけがお国に尽くす道ではない。後方にあつてそれこそ陰に陽にその手助けをしたり、或は別の新しい任務につくことも立派にお国に役立つ道である。つまり第一線であるうと後方であろうと、お国に尽くす道に全く変わりはない。貴様らの中には、娑婆にいれば当然家督を継がねばならぬ者もいれば、又妻子ある者もいる。或は、それぞれ特殊な家庭の事情もある。従つてたとえ少しでも後顧の憂いがあれば、特攻隊員の資格は覚束ない。今俺の言つたことを頭の中でよく咀嚼し、塾考を重ねたうえで、各自自分の心に叶つた、自分の身に合った選択をするように……。

他人に相談することは厳禁する。今手元に配つた用紙は、志願するかしないか、貴様らの考えを率直に、忌憚なく書いてもらうためだ。書く要領は、志願する者はマル！志願できぬ者はバツテン！どちらも判断つかぬ者はサンカク！今から三十分間、時間を与える。静にかかれ！」

たった〇と×と△のいずれかを書き記すだけのことであつたが、その時の三十分間を私は今でも忘れることが出来ない。講堂は水を打った様に静かになつた。きたるべきものがきたと気負ひ込んで息を弾ませながら虚空を睨付ける様にしている者がいた。千々に砕ける心を懸命に統一しようとするかの様に瞑目している者もいた。伏し目がちに一点をみつめて咳一つする者もない、極限までの張り詰めた緊張感が異常なまでに迫つてくる一刻を。講堂の両袖に掲げられている「浜までは海女も蓑着る時雨かな」「最初の失敗、最後の失敗」の句が、恰も皆を諭すかの様に、優しく静かに見下している様であつた。生か死か……百数十人の戦闘機搭乗員が心の死闘を始めた。私も例外ではなかつた。いつの間にか、周りの状況は全く分からなくなり、周囲とは隔離された。たった一人の世界の中で孤独の戦いを始めていた。色々な事が次から次へと思い出された。父や母のこと、学資を出してくれた恩人のこと、親しい友人、劇団二六〇〇年座、同人雑誌『樹』……。そして両親の説得を無視して、二度に亘つて家出し、独断で慶応高等部を中退し、念願の明大文芸科へ

入学したこと……。

若気の至りのなせる業と云えるのだろうか、自分の思いを押し通すため、私は両親に辛い思いにさせた心の痛みがあつた。特攻隊志願の選択を迫られる瞬間にもこれらのことが生々しく蘇つてきて慙愧に堪えなかつた。そのような生活を送れたのも、曲折の末とはいえ両親の慈愛があつたからであつた。「よし、俺は今こそ彼らの防人になつていさぎよく特攻隊に身を投じよう。生命をなげうつことによつて、彼らや多くの銃後の同胞が連日の空襲と食糧難から解放され、一日も早く平和な生活が得られるならば、もつて瞑すべきではないか。……すべては国のためなのだ」

私は〇を書いた。×を書いた者も、△にした者もそれぞれの限りを尽くして、自得した結論を記したに違いない。

それから二日経つた三月二十日、特攻隊のメンバーが発表された。私もその一員に入つていた。同期の桜は四十人余りであつた。このメンバーは、それから終戦を迎えるまでの半年間は連日連夜、赤トンボ(九三式中間練習機)に二十五番を抱えての離着陸訓練、高度二千メートルからの突入訓練、海上での超低空飛行訓練が続いたのである。



九三式中間練習機 (赤トンボ)

山本氏略歴

昭和十八年十二月 武山海兵団
三重航空隊を経て築城航空隊
テレ朝・TBSプロデューサー・
ディレクター

筆者追記

特攻隊員希望調査の際、隊長は特攻機種について「搭乗する兵器は軍の機密で今は言えない」と赤トンボであるとは言わなかった。私には詭弁と云うか上手にかわしたと思える。搭乗機種を希望するなら速度が速く、敵機の攻撃をかわす機動力の有る機種を望み突入を成功させる。もし赤トンボと云っていたら○希望は半減していたであろう？

然し、フライピン決戦で作戦機を失い、白菊等練習機も戦力化が急がれ、実際練習機に戦果も有った。赤トンボの特色もその一つ、最大速度二一四km/時と遅いが機動性は高く、木製・布張りの胴体・翼であり、レーダー探知され難く、砲弾の信管も作動され難い利点があり、本土決戦の戦力化に備え訓練に励んでいました。

終戦の詔勅が下りた後の西田隊長の慎重な判断(部下を誤情報で無駄死にさせない)には敬服しています。

第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将は「未だ停戦命令に接せず、多数殉忠の将士の跡を追い特攻の精神に生きんとす・」
彗星十一機を用意し八月十五日夕刻沖縄方面に向かった。

これに連合艦隊司令長官小沢治三郎中

将は、宇垣中将は命令違反であるとして、十六日朝航空参謀に伝えた言葉を思い出します。「皇軍の指揮統率は大命の代行であり、私情を以て一兵も動かしてはならない。玉音放送で終戦の大命が下されたのち、兵の道づれはもつてのほか、自決して特攻将兵の後を追うなら一人でもやるべき」明快な言葉です。感情に基づき其の意を決するな！でしょう。

世田谷山観音寺での特攻観音月例法要の直会の折、元零戦パイロットの野口氏に伺った。特攻志願の記事を読んで疑問があつたので「特攻隊員選考は○×△自身希望で決められた？」その通りですと、強制(命令)ではなかったとのコメントをいただきました。

大西瀧次郎中将の「特攻は統率の外道」と言われたのを思い出し、これが形として表したものと思いました。自ら意を決し、任務を達成するため必死な訓練に励み、国の為に命を捧げた特攻隊員、そして生き残ったこの記念誌の想い出が、慰霊・顕彰の一助になれば幸いです。

次号も「トンボ特攻隊員」の回想です。

中溝二郎様が去る5月19日急逝されました。
 中溝様は、海上挺進隊の事績を残すという想いで、平成30年5月から会報に陸軍海上挺進隊関連記事を多数寄稿されました。
 会報129号(令和2年2月)にはご自分の体験をご投稿されています。原稿はすでに最終稿まで頂いており、近く完了する予定です。
 中溝様のご冥福をお祈り申し上げます。

金子 敬志

第二六戦隊及び基地第二六大隊戦闘経過

会 員 中溝 二郎

海上挺進第二六戦隊は、昭和十九年九月幸ノ浦に集合し、訓練に入ったが、十月二十五日に正式に編成となり、暁第一九七六五部隊と称した。戦隊長は陸士五三期の足立睦生大尉で、第一中隊長は富田順行中尉(陸士五六期)、第二中隊長は田辺晃平少尉(幹候九期)、第三中隊長は岸本具郎少尉(陸士五七期) 副官は齋藤清見習士官(幹候一〇期 二〇年一月少尉)で編成され、群長は久留米第一予備士官学校出身幹候一期の見習士官、隊員は各地の隊から志願により採用されてきた現役下士官であった。

十一月一日から幸ノ浦の第一〇教育隊

で総合訓練に入り、十二日に舟艇を受領して輸送船に乗りこみ、十四日宇品を出航し、翌十五日門司に寄港、ここで福山丸と彦山丸に分乗し、十二月十日に鹿児島港を経て沖縄に向った。

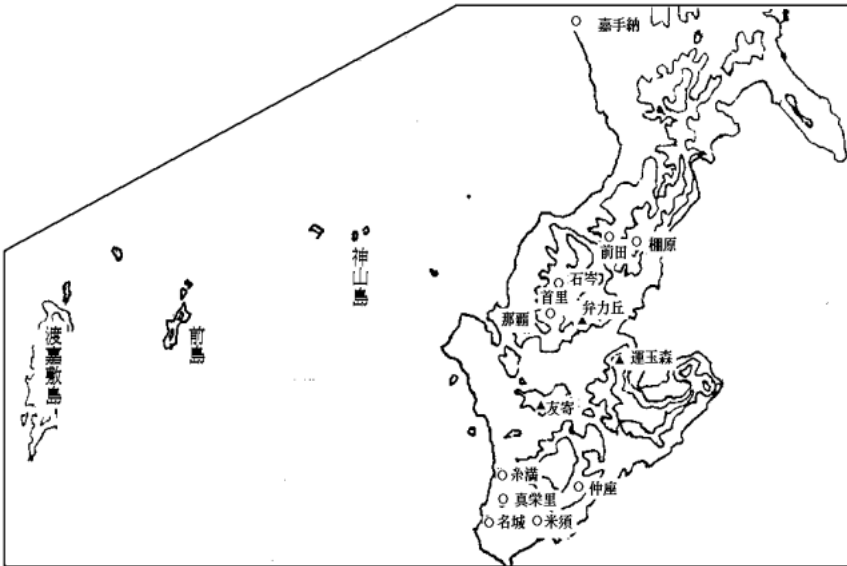
十三日沖縄の慶良間列島中の渡嘉敷島(既に第三戦隊が配置されていた)に到着し、同島の留利加波に上陸し舟艇の秘匿を行なったが、以後戦隊の主力である本部、第一、第二中隊は同島の渡嘉敷部落に、第三中隊は阿波連に駐屯していた。

昭和二十年に入って、戦隊本来の配備地区である糸満南部一帯への移動を開始した。一月一日の第三中隊の出発を初めとして、三月三日までの間に移動を完了したが、この渡航中に本部及び第二中隊の舟艇の一部が、米軍機の空襲を受けて沈没するという被害があった。

本島に移転した後は、主として糸満地区で訓練と整備を行っていたが、三月二十三日から米軍艦上機の来襲に始まる戦闘状態に入り、四月一日には米軍は嘉手納海岸に上陸を開始したので、戦隊は出撃準備に万全を期していた。

米軍が沖縄本島に上陸後の四月七日、

船舶工兵二六連隊から派遣された西岡少尉らが、神山島に据えられた米軍砲台陣地への斬込みに呼応し、戦隊に対し、四月八日夜一時を期して嘉手納沖に碇泊する米輸送船団に対する攻撃命令が出され、各中隊は基地隊の協力のもとに泛水



作業を行ったが、干潮のため泛水作業に手間取り、第一中隊は十八隻、第二中隊は出撃が遅れて夜間に船団泊地に到着することは不能となったため、全艇が途中で引返し、又第三中隊も実際に出撃したのは中隊長岸本具郎少尉以下二隻のみ、他は出撃を中止した。

このため実際には、二十隻が第一次の出撃を行ない、艇隊は嘉手納沖の米船団泊地の艦船群に突入した。なお同戦隊のこの日の出撃については、軍司令部は戦果として駆逐艦一隻、輸送船二隻を撃沈し、このほかに海上での火柱三を地上から望みできたと報告している。

この出撃で第三中隊長の岸本少尉以下十三名が海上戦死を遂げた。

次いで四月十日に第二中隊の野田見習士官以下約一〇名が改めて出撃命令を受けて出撃を行なった。この出撃では全員が帰還したが戦果は不明であった。

更に四月十五日、夜一〇時から一二時を期して、第二中隊と第三中隊の合計二隻が、第三次出撃を嘉手納西方海面に行い、米軍の艦艇中、駆逐艦一隻、艦種不詳艦一隻をそれぞれ撃沈し、同じく不詳艦三隻を炎上させたと報告されている。又、此の出撃で三名が戦死した。(特攻戦死者は三名となっている)

また四月十九日夜、第四次の海上出撃を行なった。この時には戦隊の残存艇は、各中隊併せても二〇隻に過ぎなかったが、この出撃では艦船四隻を撃沈したと伝えられた。

これら一連の出撃に対する米軍側の資料として「米海軍作戦年誌」によると、四月八日の出撃については駆逐艦一隻(チャールス・J・バツジャー)と上陸作戦資材輸送船一隻(AKA・スター)が損傷を受けたとされている。

又、四月十五日の出撃については「作戦年誌」では掃海特務艦一隻(YMS・三三一)が神山島南東一、五〇〇米の海上で特攻艇による損傷を受けたと記録しており、四月十九日の出撃に対する米軍側資料の裏付けは残念乍ら無い。

なお、軍籍のない米商船の喪失状況は資料がないので詳細は不明である。

この出撃後、四月二十八日に、戦隊は陸上部隊に参加するよう命令があり、残りの舟艇を第二八戦隊に引渡し、五月一日に戦隊長と戦隊本部の一部及び第一中隊主力と第三中隊の残存者は、二四師団(山部隊)に、本部と第一中隊の一部及び第二中隊の残存者は、六二師団(石部隊)に、また第一中隊長富田中尉他一部は船舶団司令部にそれぞれ配属されるこ

とになり、戦闘の第一線として、激戦を展開中の前田高地等の戦闘に加わった。

更に五月四日に決行された日本軍の総反撃作戦には、それまで第二線配備にっていた第二四師団を中心とする新たな戦力を第一線に配備して総攻撃を開始した。

しかし米軍の反撃はものすごく、日本軍はこの総攻撃で甚大な損害を被り、戦力は著しく低下した。

この戦闘では当時二四師団に配属されていた浜永見習士官以下四名が戦死した。

その後五月二十日まで地上戦闘、挺進斬込及び連絡等に当たっていたが、以後軍司令部が首里から南部海岸の摩文仁に撤退する三十一日までの間は、首里近辺にあって、同地の防衛に当たり、主として首里郊外の弁が岳を中心に守備し、首里の占領を目指して急進してくる米軍との間で激戦を行ない、この間に二十一名が戦死した。

六月上旬、軍の南部撤退作戦に伴い、戦隊の残員も首里から撤退して島尻地区南端に後退し、その月の中旬まで島尻地区で他部隊と合流して防衛戦に当たっていた(田辺少尉以下七名戦死)が、特に六月十九日には、いったん米軍に占拠された真栄里高地奪回のため突入し、中隊

長富田中尉以下十二名がここで戦死した。これまでの戦死者は十九名であった。

六月二十三日未明、第三十二軍司令官牛島中将及び参謀長長勇中将は摩文仁の丘の洞窟で自決した。戦隊残員は、他の部隊と同様に、既に組織的な戦闘は終了し、単独、または他部隊の者と三々五々遊撃戦をする程度となり、一部は国頭方面への突破を試みて北上しようとしたが、ほとんどは失敗し、最後は主として最南端に近い、国吉、山城、名城付近に潜在し、九月に入って敗戦を知った。この地域での六月二十日以降の戦死者は戦隊長足立大尉以下二十一名である。

これらの戦闘により、被害状況は戦隊長を始め将校十四名下士官七十六名の計九〇名が戦死した。なおほかに転属者三名があった。

海上挺進基地第二六大隊は、暁第一〇一七二部隊と称し、昭和十九年九月十七日、一三期特別現役志願将校の豊福安則大尉を大隊長とし、中隊長は第一中隊長に町原中尉、第二中隊長に赤司中尉、第三中隊長に沼中尉、整備中隊長に衣笠中尉として、姫路の中部第四六部隊で編成を行なった。

十一月月上旬に鹿児島港を発って沖縄本島の国頭郡金武(キン)村屋嘉(ヤカ)

に上陸し、整備中隊のみは十二月十三日に戦隊とともに渡嘉敷島に上陸していたが、昭和二十年に入って戦隊の移動に伴い、本島に移った。

昭和二十年二月に、戦隊の渡嘉敷から糸満地区への移動に伴い、北部にあった大隊主力も島尻地区に移動し、糸満真栄里付近で、舟艇秘匿壕の設定及び陣地構築を行なっていた。

二月二十三日に、二月十七日付による軍の大隊改編の命令により、大隊は独立第二六大隊と、独立第二六勤務隊(これは現地の防衛召集兵を主体とするもの)と、独立第二六整備隊の三つに分けて編成された。

以後、主力であった独立第二六大隊は、四月二十九日に二四師団(山)歩兵第三二連隊(第三四七五部隊)に配属され、当初は島尻地区の米須付近にいたが、五月に入って前進命令を受けて北上し、五月五日には、前田一石嶺の第一線陣地で戦闘に加わり、特に五月三日から四日にかけての軍の一斉反撃の際には、全員が第二線斬込大隊として、棚原西方の一四三、四高地攻撃を企図し、四日宜野湾街道を北進し、一二〇高地を攻撃したが、この反攻戦闘の際に豊福大隊長は負傷し、中隊長もほとんど戦死するという致命的

な状態になり、大隊も前田南方五〇〇米の、勝山部落に後退した。

次いで五月十一日に、大隊中の一コ中隊は、第三二連隊長北郷格郎大佐(生存)

の命令により、米軍に包囲されていた独立臼砲第一連隊本部(連隊長入部兼康少佐)と、独立歩兵第一一大隊の本部、並びに歩兵第三二連隊第三大隊本部の救援をするために攻撃を行ない、これらの救出に成功するという功績を挙げた。

爾後、勝山部落に後退したあと、第三二連隊第三大隊に属し、攻撃再開のため準備していたが、六月一日に残存者は岡少尉の指揮で、糸満付近の戦闘に加わり、甚大な損害を蒙った。

次に独立第二六勤務隊は、第二六戦隊と同じ地にあつて、四月中に行なわれた戦隊の数次の舟艇出撃に協力した。

その後玉井少尉以下一コ小隊を糸満に残して、海上挺進第二九戦隊の舟艇出撃に協力した。

主力は町原中尉が指揮して、運玉森を占拠した米軍に対し攻撃をかけ、激戦を行なったが、遂に奪回できず、この戦闘で全滅した。

また独立第二六整備隊は、四月に勤務隊とともに戦隊の舟艇出撃に協力した後、五月に入って一部は独立混成第四四旅団

の輸送隊となり、友寄部落に位置して弾薬・患者の輸送に従事していたが、逐次兵員減少してその機能を失った。

五月二十七日糸満地区に残っていた勤務隊の一コ小隊は、第二八大隊の稲田少尉の率いる一コ小隊とともに戦闘中隊を編成し、与座、仲座付近で戦闘を行なつて全滅状態となり、その後六月二十日頃からは、生存者は各個に遊撃戦を行なっていた。

大隊長の豊福大尉は、五月四日中部の前田高地で戦死。

大隊の戦死者は八百三十八名、生還者は五十三名と云われている。

水無月供養頌

第二中隊群長佐々野 正憲

(事務局より、本文は相当長いので一部割愛しました)

一、沖繩本島に到着から出撃まで

(一) 十二月十三日、沖繩の渡嘉敷へ到着

十二月十四日、渡嘉敷島へ上陸
十三日は点在する島々の間に一夜の夢

を結んだ。翌十四日は早朝より強風が吹荒れ、予定の上陸作業の困難さが予想された。このまま上陸を強行すれば、舟艇に何らかの被害を受けるかもしれない。

然しこの輸送船団は更に遠く南海の戦場へと急進せねばならない。

戦隊長の命令一下、折からの悪天候を冒して上陸作業を開始した。案じた通り山のような波の中で舟艇の運行は困難を極め、海岸線に到着上陸の際には予想以上の被害を受けた。即ち、渡嘉敷島中部に上陸した一・二中隊の舟艇は殆ど、大に止む無く上陸した者があり、僅か阿波連に上陸した三中隊の主力が被害もなく作業を終えた有様であった。又、既に渡嘉敷島に駐屯中の第三戦隊の協力を得て、翌十五日夜半になって形だけは上陸を完了した。

(二) 十二月十六日～三十一日
早急に舟艇の大整備を、戦隊全員並びに既に沖繩本島に駐屯していた戦隊基地の協力のもとに実施した。

第二十六戦隊の正規の駐屯地は沖繩本島の西南。糸満町付近と定められていたため、駐屯地への進駐は一日も早く実行せねばならず、寝食を忘れ復旧作業を継続した。

(三) 昭和二十年一月一日、第三中隊、糸満へ転進
昭和二十年元旦を迎える。戦隊においては形ばかりの雑煮を祝い、戦隊長以下

全員、阿波連に集合、遙か祖国に向い聖寿の万歳を唱え、戦隊活躍の秋来たるを決意した。

この日、第三中隊主力は直ちに糸満への移駐を開始した。

(四) 一月二日～三月三日、戦隊全員、沖繩本島への移駐

第一回の進駐を了えた戦隊は残存舟艇の整備に拍車をかけ、整備を完了した舟艇から逐次本島へ、本島へと進めた。
(五) 三月三日に戦隊全員が沖繩本島への駐留を完了した。

戦隊本部は国吉部落へ、第一中隊は真栄里部落に、第二中隊は南方の名城部落に、そして第三中隊は糸満に駐屯と決り、各中隊の舟艇は、その中隊のいる部落の海岸に隠蔽し、戦隊員は常時整備を怠らず、基地隊は隠蔽の壕掘作業に全力を傾倒した。

日毎激しさを増す米軍の空襲・偵察は在島の諸部隊に、これからの来襲を予告するかのようであった。

(六) 四月一日、米軍、嘉手納海岸に上陸、徹底せる空襲と艦砲射撃の後、遂に八時半頃。米軍は沖繩島西海岸中部の嘉手納に上陸を開始した。

来るべきものの愈々来たるを覚悟して、「泊地攻撃の命令はいつか」と、待ちつ

つ、中隊毎に攻撃上の作戦の打ち合わせを検討し、又、舟艇の整備に万全を期していた。

二、嘉手納沖に出撃

四月八日、嘉手納沖泊地攻撃

四月七日の夕刻、戦隊長から各中隊長集合の命下り、八日夜間攻撃の指示を受けた。

(一) 第一中隊陣中日誌より

四月七日、軍命下令、我二十六戦隊に出撃の命下る。戦隊長足立大尉各中隊を巡回し奇襲計画を傳ふ。

命令要旨

「第二十六戦隊ハ明四月八日二十四時系満港出發明九日三時嘉手納輸送船団ヲ奇襲セントス。各隊ハ二十三時迄二出發準備完了スベシ。細部二関シテハ中隊長ヲシテ指示セシム。」

遂に我々の運命は決す。最早や今日限りの命かと各人持物を整理す。過ぎし宇宙よりの事共を御互ひに語り、いつかは今日の日の来るを諒想して居た我々であった。今更家を思ひ親を慕ふのではないが生きて帰らぬ決心があればある程、二十有余年の思ひ出は尽きぬ。

最後の一夜をそれぞれ思ひ出に中々に眠れぬ。弓岡軍曹の最後の尺八が艦砲の間に聞へて来る。

永田曹長が愛妻光技さんの写真を出して別れを惜んで居る。朗らかな彼も何か心の奥に一抹の淋しさを見逃し得ない。

四月八日 愈々出撃の日、依然として

艦砲空爆は熾烈なり、夕方近く洞穴前広場にて出陣式に続いて酒宴を催す。全員白鉢巻、軍刀を背に負ひ、拳銃を腰間に擬したる其の征姿颯爽たり。中隊長富田中尉の自作詩吟「白龍」に依り宴会の幕は切られた。皆最期の酒を飲み干す。

二十三日頃泛水終る。各艇始動開始。

機関始動と同時に音響探知器に依るのか？艦砲射撃熾烈となる。二十四時出發準備完了。(泛水・舟を水面に浮べる)

中隊長艇より出發の発火信号に依り各艇十八隻系満港を後に海上の人となる。

敵哨戒網は極めて嚴重にて照明弾は間断なく発射せられて昼を欺く許り。加へ

て沖合よりの大小艦艇よりの探照灯が一斉に放射せられ我艇隊は其の光芒の捕捉する処となり猛烈なる射撃を蒙り行動・連絡極めて困難、中隊は遂に支離滅裂となるも、各個に肉弾攻撃を敢行攻撃する。

当日第一中隊戦没者北川見習士官以下九名(第一中隊陣中日誌 以下略)

(二) 第二中隊戦闘記録

四月七日 出撃命令

戦隊長より受けた命令は「明八日夜半

戦隊出撃」であった。

1, 四月八日 嘉手納沖米軍泊地攻撃

いよいよ待望の出撃の日がきた。夜間の出撃を前に最後の一睡をするようにと

の中隊長の指示に、全員静かに横になつた。然しながら出撃を前にして各人の想ひは遠く祖国の親族に、また山河に在り、或は晴れの舞台に於ける渾身の活躍振りを想像するなど複雑微妙で、その間の心境は到底筆に或は口にする事は出来ない。時々刻々出撃の時も迫り、夕刻迫る頃、

中隊長以下三十名は最後の宴を催した。

出撃時刻が到来して、基地中隊協力の下に出撃準備をおこなつたが、折柄汐の干潮、その他の事情で予定より遅れる事

二時間にして、ようやく出撃することができた。

四月九日 攻撃と基地帰還

中隊は敵泊地に向けて出發したが、那覇港附近まで進撃した時は、既に夜が明けて九日に入つていた、白昼となり、敵泊地では小艦艇が多数出沒して警戒厳しく目標艦艇に肉迫攻撃せんとするも目的を達し得ず、やむを得ず再起を期して基地へ引上げるに到つた。

中隊員は次回出撃への尊い体験を得て、

今度こそはと固い決意を誓つた。

2, 四月十日 中隊第二次出撃

第一回出撃後、米機による空襲、艦砲攻撃に依り破損を受けたものを残し、約十隻の完全な戦闘可能舟艇を以つて攻撃を敢行した。この日は野田見習士官以下約十名乗艇の艇隊が主に駆逐艦海防艇に肉迫攻撃し、中には舟艇を破損されつても目的を完了するものもあつたが、全員無事帰還することができた。

3、四月十五日 田辺中隊長以下出撃
この日中隊長以下若干名（人員不明）が出撃を敢行した。（三中隊も同時出撃か？）夜明け頃中隊長以下全員無事帰還した。特に中隊長は、米駆逐艦に肉迫し正に攻撃せんとした際に察知され、艦上から手榴弾を投下され左肩を負傷されたが、爆雷投下を完了し、戦果を確認して帰還された。中隊長は自分の負傷はひた隠しに隠され、中隊員がこの負傷を知つたのは後日のことであり、中隊長の日頃の御気質を推察できるものと思われる。

（第二中隊戦闘経過 以下略）

三、戦果及び犠牲者

（一）四月九日、嘉手納沖泊地突入、中隊二隻のみであつたが、天晴れ攻撃に成功し、輸送船約六隻、小舟艇十隻に被害を与える戦果が確認されたと日本側は発表している。

戦没者 特攻特進
第一中隊 群長掛谷義雄見士以下九名
第三中隊 岸本具郎少尉以下四名
後日、米軍発表の資料により、信用性の高い戦果は次のとおりである。

駆逐艦 撃沈一隻
輸送船 大破一隻、小破二隻
他小舟艇 撃破二隻

（二）四月十日〜十五日、残存舟艇による攻撃
第一回の攻撃にて多数の戦隊員と舟艇を失つたが、戦隊では第二、第三中隊をもつて、第二回、第三回の攻撃を決行し、駆逐艦その他約五隻の戦果を挙げた。

戦没者 特攻特進
第三中隊 馬場 秋男准尉以下三名
四月十五日戦果（米軍資料による）
輸送船 大破一隻
四月十七日戦果
〃 大破一隻（？）

四、地上戦闘に参加
（一）四月二十八日、海上戦闘より地上部隊へ
突如、各中隊長に左の命令が戦隊に下つたことが伝えられた。
「二十六戦隊は、海上戦闘を中止して、地上部隊第一線へ参加せよ」（第三中隊は、中隊長故岸本少尉を第一回目の出撃

にて失い、第一小隊長森岡見習士官が代理を勤めていた）
戦隊員は、従来の海上進身隊の任務から、地上部隊に参加することになり、準備をととのへ、又残存舟艇その他一切を第二十八戦隊に申し送つた。

隊員の転属先
1 「山」兵团（二十四師団）第三十二連隊へ
戦隊長以下戦隊本部（一部）・第一中隊主力・第三中隊全員（約四十名）
2 「石」兵团（六十二師団）へ
戦隊本部斉藤副官以下一部・第一中隊一部・第二中隊全員（約四十名）
3 第一中隊長富田中尉は船舶団司令部

附
四月三十日、地上戦闘参加のため、各自訣別して各配属部隊に向けて出発した。半年にわたり、死線を越えて魂と魂が完全に結ばれた戦友の絆はたとえ体は離れても、その絆の解ける筈はない。

然し、直接相見える日は今の一瞬にして終るやもしれぬと思ふ時、戦隊員皆、手と手を握りしめて、涙をかくしながら最後の別れを惜しんだ。戦隊長は愛しき部下を、自己の手元から他部隊へ送らねばならぬ愛惜の情をひた隠しつつ強い激励の言葉を送つた。

五、地上戦闘状況

六月一日より六月十日前後、首里市の攻防戦は絶頂を越え、ほぼ態勢が見え始めてきた。戦力に於ける余りにも大きな差は如何とも仕難く、遂に首里より後退することに決した。そこで、弁ヶ岳方面にあった『山』兵団はその主戦地線まで後退し、『石』兵団は戦闘を続行しつつ逐次後退した。

この間『山』兵団に配属された我が戦隊員はその主戦地であった沖縄南端島尻郡におり戦力の再建を図り、『石』兵団に属した我が戦隊員は津嘉山←南風原←糸満と逐次戦いしつつ後退した。

首里市後退後、米軍は破竹の勢いをもつて来襲し、一挙に島尻郡へ殺到してきた。

六月十日より二十日前後

沖縄本島の殆どが米軍の手中に陥ち、僅か本島の南端に於て日本軍は最後の死物狂いの反撃・抵抗を試みた。

『山』兵団に配属中の戦隊員は、その頃、船舶団司令部附として首里にあった第一中隊長富田中尉を迎え、戦隊基地隊よりなる戦闘部隊を編成し、真栄里の丘陵地帯に拠って、最後の壮烈極まる戦闘を決行した。

又、『石』兵団に配属中の者は、その配属先部隊よりの信頼を双肩に担って

戦った。

沖縄戦闘開始以来戦没した戦隊員は次のとおりである。

海上戦闘にて戦死（特攻特進）十六名
陸戦において戦死 七十四名
戦没者合計 九十名
生還者 十四名

六月二十日以後、首里市より後退した軍司令部は、その後、沖縄島南部の摩文仁の丘陵にあつたが、米軍の猛烈なる攻撃は、その丘陵地帯前面にまで迫られ、軍司令官・参謀長は共に壮烈なる自決を遂げられた。即ち、六月二十三日であつた。

激戦のあと夢にして

秋の風大いなる

この運命かな生と死と

第二七戦隊及び基地第二七大隊戦闘経過

会 員 中溝 二郎

海上挺進第二七戦隊は、昭和十九年九月幸ノ浦に集合し、訓練に入ったが、十月二十五日正式に編成となり暁第一九七六六部隊と称した。

戦隊長は、陸士五二期の岡部茂己大尉（十二月少佐になる）、第一中隊長は松本恭男中尉、第二中隊長は児玉健中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長は

伊藤正少尉（陸士五七期）、副官西村正雄見習士官及び群長は久留米第一予備士官学校（一名は前橋）出身幹候一期の見習士官、隊員は下士官及び下士候補者の現役兵で編成された。

編成以後も、十一月三十日まで幸ノ浦で訓練を実施していたが、十二月七日に戦隊本部と第三中隊の主力は大亜丸で、舟艇七十二隻を積載して宇品を出航し、門司及び鹿児島を経由して、二十九日に沖縄本島東岸の与那原に着き、昭和二十一年一月七日に第一中隊が、また二十五日には第二中隊も舟艇とともに那覇に到着し、全部の到着をみたので、同日付で第一野戦船舶団長大町大佐の指揮下に入ることとなった。

二月に入つて逐次各中隊は、予定基地の与那原に移動を行ない、同月中には隊の配置を終った。

なお第三中隊は、与那原の南東一キロの地点にある板良敷に、舟艇とともに駐屯した。

以後、それぞれの地区で訓練及び舟艇の整備を行なっていたが、三月二十三日以後は、米軍艦上機による空襲、更に二十四日からは米艦艇の艦砲射撃を受け始めるに至り、遂に四月一日には、米軍は西海岸に上陸を開始したので、戦隊も西

部海面の米軍船団攻撃に備えるため、第一中隊を四月十六日にトラック輸送で、舟艇を那覇付近の豊見城(トミグスク)、饒波川地区に移動させた。

四月二十六日、第二中隊は中隊長以下舟艇十五隻で出撃を準備している際、爆薬の誘発事故と、米軍の攻撃により舟艇事故が起り、陸上で被害を出し、出撃可能舟艇は二隻のみとなった。

この二隻は、中城湾内の米艦船を攻撃し、駆逐艦一隻を沈めたと報告されたが、この日事故と海上で十五名が戦死し、出撃者のうち中隊長艇だけは生還した。翌二十七日に、豊見城にあった第一中隊は、舟艇十四隻で那覇から出撃し、大型輸送船一隻、駆逐艦一隻を撃沈したと報告されたが、この出撃では五名が戦死した。

四月二十九日になると、与那原の西南部にある雨乞森陣地は、米軍の集中爆撃を受け、このため第三中隊の第一小隊が全員戦死という損害が生じた。

五月三日、軍の反撃攻勢に呼応し、本島の東西で上陸用舟艇や和船を利用して海上を北上し、敵の背後へ奇襲上陸する作戦が立てられた。戦隊も此の逆上陸作戦に残存の舟艇の総力を挙げて支援することとなり、東海岸の中城湾側からは逆

上陸部隊船舶工兵第二三連隊を海上援護するため、本部、第二、第三中隊の舟艇二〇隻乗員三十一名が与那原を出発して中城湾及び勝連半島附近の輸送船団を攻撃し、駆逐艦一隻、大型上陸用舟艇及び大型輸送船の計三隻を撃沈したと報告されている。この時の人的損害は戦隊長岡部少佐以下十五名が戦死し、泳いで帰還した者が十三名あった。

一方この日には、西海岸にも第二九戦隊及び第二八戦隊とともに、戦隊の舟艇五隻を出撃させ、船舶工兵二六連隊の兵力を米軍陣地後方への逆上陸を支援し、これは舟艇は喪失したが、一応兵員の上陸には成功した後、全員が帰還した。なお、これらの逆上陸部隊も、海上又は上陸後に殆ど全滅し、この作戦は失敗に終わった。

五月二十七日、第一中隊は残存の全力を挙げて西部海面に出撃したが、戦果は不明であった。また、同中隊の復員者は一名で、中隊のその後の行動および終戦時の状況は不明である。

一方与那原に残った第二、第三中隊の残員は、五月二十日知念半島に転進し、五月二十八日の軍命令により軍態勢交換後の情勢の収集と遊撃戦を実施しつつ持久を策していたが、六月三日の戦闘で六

名が戦死、九月二日、米軍の武装解除に応じた。

これら一連の出撃に対する米軍側の資料として「米海軍作戦年誌」によると、四月二十六日に東海岸で米駆逐艦一隻(ハッチングス・DD-476)の大破及び四月二十七日那覇から出撃した第一中隊により米上陸支援艇一隻(LCS・L37)を大破放棄(木俣滋郎著「日本特攻艇戦史 Richard O'Neill, Suicide of "Suetsu"」)また、五月三日には東海岸にて上陸作戦資材輸送船一隻(AKキャリーナ)が損傷を受けたと報告されている。

なお、この戦隊に関係することに「桜挺進隊」のことがあるので、以下簡単に触れておく。

四月一日に西海岸に上陸した米軍は、二日には早くも東海岸に達し島を南北に分断した。守備軍(第三二軍)は南部の中頭・島尻地区の主力と北部の国頭地区に配置した部隊との連絡が意の如くならず、遂に四月十六日を以て無線連絡も途絶し、軍の作戦に支障を来すに至った。軍参謀部は、北部地区に情報班を潜入させ、情報収集の任に当たらせるため、参謀部勤務(情報係)の浦田国雄少尉以下七名に挺進連絡することに決した。

山部隊（二四師団）に属し、その歩兵第八九連隊第三大隊とともに行動したが、

五月中旬には運玉森にあつて米軍の南進阻止に努め、五月二十三日には与那原に進出してきた米軍に対し、西進を阻止するため、激しい戦鬪を繰返していたが、戦死者を多く出し軍の命令により二十八日に撤退、南下して与座間に転進した。

以後六月二十三日に、組織的戦鬪を終了するまで同地付近にあつた。

大隊長有働少佐は、六月二十一日、本島の南部で戦死。

大隊の戦死者は七百九〇名、生還者は九〇名と云われている。

櫻挺進隊及び前田小隊の行動

第三中隊長伊藤 藤

正

はじめに

昭和二十年四月一日早朝より嘉手納・北谷正面に上陸を開始した米軍は、翌二日には早くも島を横断して東海岸に進出し、長さ百キロに及ぶ沖縄本島を南北に分断してしまつた。

日本守備軍である第三十二軍主力は、それより以南の中頭・島尻地区に主陣地を構築し、北部の国頭地区には一部の兵力を配置したのみであつたが、南北の連絡意のごとくならず、遂に四月十六日をもつて無線連絡も途絶し、軍の作戦に支

障を生ずるに至つた。

四月二十日、軍参謀部は、北部地区に情報班を潜入させ、情報収集の任に当たらせることを決定し、情報班の浦田国夫少尉（鹿児島師範・中野学校）を長とする六名の櫻挺進隊を編成し、その海上輸送の任務を与那原地区に展開していた海上挺進第二七戦隊に命じた。

その任務を板良敷に展開していた第三中隊に命じ、第三中隊長伊藤正少尉は、第三小隊長前田力敏見習士官以下八名をもつて担当させた。

そして、不可能を可能にし、決死敢闘三名の隊員を失つたが、見事にその任務を遂行して軍の作戦に多大の貢献をし、軍司令官牛島満中将より感状を授与され、当時の本土の新聞にも報道された。

本書は、両隊長の手記の一部である。戦争の是非はともかく、当時の勇氣ある日本人の物語として後世に伝えたいと思ふ次第である。

夏草や兵どもが夢の跡 芭蕉
櫻挺進隊戦鬪日誌 浦田 国夫
元櫻挺進隊長 浦田 国夫
以下記述するところは特に注記する
ほかは、戦後収容所で整理した浦田

国夫少尉記述「櫻挺進隊戦鬪日誌」

による。

挺進連絡隊の編成

軍司令部と國頭支隊間の通信連絡は、國頭支隊本部の転進に伴い四月十六日断絶した。

軍司令部参謀部勤務（情報係）の浦田國夫少尉（中野学校二俣分校出身）は、國頭方面の情報を収集するため、自ら挺進連絡することを計画し四月二十日次の軍命令を受けた。

作命乙第二七号 四月二十日 首里
一 軍ハ國頭、中頭地区ノ情報ヲ収集シ
作戦指導ヲ有利ナラシメントス
二 浦田少尉ハ挺進隊長トナリ別紙人員
ヲ指揮シ國頭地区ニ挺進スヘシ

三 主要ナル任務左ノ如シ
國頭地区ノ敵情、友軍状況、北、中
飛行場ノ状況止ムヲ得サル場合ハ遊撃
戦展開ソノ場合ハ本部ニ報告スヘシ
四 任務遂行ニ当リテハ敵ニ企図ヲ秘匿
シ住民ニ注意シ敵ニ乗セラレサル如ク
細心ノ注意ヲ払ウヘシ

五 通信ノ事項ニ関シテハ主任参謀ヲシ
テ指示セシム

別紙（人名）
軍曹 岡幸男 伍長 村上千秋
二等兵 仲地朝明（師範生 國頭出身）
電信第三十六聯隊

伍長 木村勇 一等兵 山内豊 一等兵

原田育甫(師範生) 無線機一

注 右命令はメモによるか。記憶によるか浦田少尉も明確には分からないが記憶によるものと推定される。以下同じ。
浦田挺進隊(桜挺進隊と呼称した)は与那原付近から海上挺進第二十七戦隊の海上特攻艇五隻により海路を突破して國頭に向かうこととなった。輸送艇隊の要員は次のとおりである。

指揮官 見習士官 前田力敏

隊員 高谷柁男軍曹・藤中福一軍曹・

和泉澤文雄伍長・栗原夏雄伍長・竹内稲

雄伍長・佐々木良二伍長・渡邊芳忠伍長

國頭への前進 浦田挺進隊は四月二十

三日二〇〇〇ころ軍司令部を出発し二三

三〇ころ与那原に到着した。一行の援護

として軍司令部の林三夫少尉の指揮する

師範生二〇名が与那原まで同行したが、

途中林少尉は艦砲射撃により戦死した。

挺進隊は四月二十五日二一三〇ころ特

攻艇五隻に分乗して与那原を出発し、米

艦艇の警戒網の目をくぐり二十六日〇五

三〇ころ大浦湾スギンダ浜(名護南東七

料)に上陸した。

浦田少尉は部下を海岸近くに潜伏させ、

岡軍曹を率いて久志岳に入り、第三遊撃

隊第四中隊長竹中素少尉と会い同隊に一

泊した。

浦田少尉が海岸を出発したのち、二十

六日一〇〇〇ころスギンダ浜に米軍が来襲したので。前田見習士官は全員を指揮して特攻艇を爆破し山中に退避した。この戦闘により前田見習士官負傷、渡邊伍長戦死の損害を生じた。

注 後述朝日新聞掲載の感状には二十一日朝大浦湾到着となっているが、浦田少尉は二十六日という。

久志岳に拠点設置…四月二十七日浦田少尉は海岸に引き返し敵の攻撃を受けたことを直感し、山中を搜索して前田見習士官と合し、久志岳の竹中中隊に合流して拠点を設置して軍司令部との無線連絡を開始した。しかし連絡はとれなかつた。このころ、米軍は國頭地区の掃討作戦を実施しており海岸地区には点々と米軍が所在した。

浦田少尉は竹中隊に協力して積極的に遊撃戦を実施した。仲地二等兵は國頭出身のため地理に明るく遊撃戦の案内や食糧取得に活躍した。

軍司令部へ決死伝令を派遣…浦田少尉は無線がどうしても通じないので、國頭方面の状況報告のため軍司令部に決死の伝令を派遣することに決し、五月七日陸路行(岡軍曹 高谷軍曹 佐々木伍長 木村伍長 原田一等兵)と海路行(前田見習士官 和泉澤伍長 栗原伍長)の二三

組を結成して出発させることとした。

浦田少尉の軍司令部あての報告内容は次のとおりである。

五月八日 於久志岳 託伝令隊

桜隊ハ四月二十六日大浦湾「スギンダ」

浜到着、上陸直後敵ト交戦、渡邊伍長戦

死、前田見習士官負傷、爾後連日通信ニ

努ムルモ通セス茲ニ伝令を派ス

一 敵情

四月下旬東西両海岸道路ノ要地ニハ相

当数ノ兵力駐屯(名護聯隊本部、大浦三

千、金武三千、邊戸、奥、本部半島)シ

アリシモ五月初メヨリ続々南下シ現在極

ク僅カノ警備兵力ヲ存ス故ニ南下セル敵

ヲ撃滅セハ敵ハ再ヒ立ツ能ハサルモノト

判断ス

艦艇数隻、敵機本日ハ活澁ナラサルモ

連日北上編隊音ヲ聞ク

二 友軍状況

宇土部隊 川田、塩田以北線ニ於テ遊

撃戦展開

第一護郷隊 (五〇〇) 主力名護岳、

一部(竹中隊) 久志岳、海軍白石部

隊(一〇〇)

恩納岳 第二護郷隊(五〇〇)、大鹿隊(一五〇)、海軍(一五〇) 其ノ他防召兵多数山中ヲ徘徊シアルモ戦意全然ナシ 住民状況 戦闘開始ト同時ニ全部山中ニ避難セ

ルモ遂日ノ食糧欠乏ニヨリ一部ハ下山
ス然レ共大部分ハ軍ノ必勝ヲ信シ積極
的ニ軍ニ協力ス 殊ニ壯老人層志気旺
盛ナリ 食糧ノ欠乏ハ予想以上ニシテ
島尻疎開者ニ於テ殊ニ甚シ 現地住民
ノ糧秣最大一ヶ月、経済ハ全ク無秩序
状態ナリ

四 櫻隊爾後ノ行動

今後二週間通信ニ努ムルモ尚不通ナ
ル時ハ北、中飛行場ノ状況ヲ審(つま
びらか)ニシツツ遂次伝令ス 尚通信
不通ナルハ敵ニ電波妨害機アルモノト
思惟(しい)ス

五 意見具申

- 1 山中遊休兵ヲ指揮スル為指揮官ヲ
北上セシムル時ハ作戰上有利ナリ
- 2 遊撃戦資材送付不能ナリヤ
- 3 櫻隊モ情報収集ニ便ナラシムル為
遊撃戦ヲ併用ス 了承相成度
- 六 其ノ他詳細ハ岡軍曹ノ報告ニヨラレ
度シ 以上

陸路隊は五月八日久志岳を出発し恩納
岳に向かい、恩納岳で第四遊撃隊長岩波
大尉と連絡し、岩波大尉の依託報告書を
受領して屋嘉(石川北東四軒)に出た。
同地付近からクリ舟に乗って濱比嘉島に
渡り。同島で五月十一日海路隊(九日邊
野古崎をクリ舟で山登)と合流した。
前田見習士官、岡軍曹、木村伍長の三

名は十二日二二〇〇ころ濱比嘉島からク
リ舟に乗って与那原に向かった。クリ舟
は津堅島北東で米掃海艇と遭遇し、木村
伍長が戦死したが、前田見習士官と岡軍
曹は十余軒を泳いで與那原に到着し、十
四日軍司令部に状況報告した。
軍は國頭方面の状況を五月十七日ころ
次のように電報した。

注 本電は台参情電となつてゐるが第
三十二軍の電報を転電したものと推定さ
れる。なお、本電は乱れが多いので明確
に誤りと思われるところは筆者が修正し
た。

- 台参情電第三九七号(一七七一三〇)
- 五月十日迄ノ國頭支隊方面状況(連絡担
任者球司令部帰還報告要旨)
- 一 國頭支隊長ハ四月十八日「八重岳」
ヨリ「タニヨ」岳次テ「川田」「内福
地」ニ転進部隊ハ「ジャングル」國頭
郡・一潜伏スヘキヲ命シアリ
- 二 第三遊撃隊約五〇〇名ハ「タニヨ」
岳、名護岳、久志岳ヲ根拠地トシ、又
第四遊撃隊約四〇〇名ハ恩納岳ニ位置
シ夫々住民の支援ヲ得テ活潑ニ遊撃中、
ヘノ遊撃ハ警戒嚴ニシテ潜入困難ナル
モノノ如シ

尚恩納岳ニハ飛行場大隊其ノ他海軍部
隊約四〇〇名アリ
三 第十九航空地区司令官青柳中佐ハ配

属歩兵一中隊ヲ基幹トスルモノヲ指揮恩
納岳ニ移リ次テ再ヒ石川岳ニ進出遂次復
帰部隊ヲ掌握シツツ戦鬪準備中
四 右状況ヲ綜合スルニ目下石川岳以北
國頭郡ノ我カ兵力ハ一、七〇〇名ト推
定ス??? 熾列ナル遊撃戦ノ全
面展開ヲ命シアリ

五 國頭郡ニ於ケル敵ノ整備セル飛行場

- 1 恩納附近ニ於テ幅二七米長サ八〇
〇米ノ滑走路目下使用シアラス
- 2 金武北側目下八〇〇米既成完成ニ
ハ相当困難ヲ伴フヘシ
- 3 古我地北側距離不明
- 4 前田、「セイオケヤ」概成(筆者
注地点不明)
- 5 伊江島未夕使用シアラス 飛行機
ノ補給東北ヨリ金武湾上空ヲ経テ行
ハレアリ
- 6 金武村、湖邊底ニ大集積所アリ
- 7 伊計島、平安座島、濱比嘉島敵ナ
シ
- 8 高離島、津堅島ニハ兵力不明ノ敵
アリ、津堅島―勝連半島間防潜網構
成シツツアリ

國頭方面ノ住民土着ノ者ハ山中ニ
避難シ我カ勢力圈内ニアルモ中頭及
島尻方面ヨリ避難セルモノハ食糧難
ニ依リ大部敵ノ勢力範囲内ニアリテ其
ノ補給ヲ受ケアリ

岡軍曹再度北上…岡軍曹は軍司令部に報告後、再度國頭に挺進することを企図し、木村延義兵長を率い、防衛隊の船頭三名（玉城、玉城、中下門）と共にクリ

舟により五月二十三日〇五〇〇ころ屋嘉に上陸した。（注 出発日時不詳）

上陸と同時に米軍の攻撃を受け岡軍曹は戦死し、木村兵長は数日後久志岳の浦田少尉のもとに到着した。

五月二十六日第三遊撃隊から「軍参謀長の指示」（略）を受領した。

通信所の閉鎖と遊撃戦…浦田挺進隊は、その後も無線連絡に努めたが連絡がとれず、そのうえ食糧の欠乏は極度に達した。

浦田少尉は遂に通信を断念し、六月六日通信機を埋没し、一時挺進隊を次の三組に分散することとした。

浦田少尉、村上伍長、中下門（防衛隊船頭）

藤中軍曹、竹内伍長、山内一等兵

木村兵長、玉城、玉城（玉城兩名は防衛隊船頭）

仲地二等兵は六月二日恩納岳に伝令として派遣され途中触雷負傷し、山中に避難中の家族と合した。

浦田少尉一行は東海岸において、クリ舟を求めて軍司令部帰還を企図したが、クリ舟が得られなかった。

六月十五日浦田少尉は慶佐次（タニヨ

岳東一〇料）の山中で第二步兵隊長宇土大佐に会し、前記の軍参謀長指示を伝達した。

第三遊撃隊第二中隊長となる…六月十九日浦田少尉が第三遊撃隊長村上大尉と連絡したところ、村上大尉から戦死した菅江敬三少尉の後任として第二中隊長となることを命ぜられ、タニヨ岳東方の第二中隊の基地に行き遊撃戦を展開した。

奇跡の敵中突破

国頭挺身連絡隊戦記

元海上挺進第二七戦隊第三小隊長

前田 力敏

大東亜戦争も終局に近づいた昭和二十年四月一日、米軍は遂に沖繩本島に上陸を開始した。その頃、私は海上挺進第二十七戦隊（球一九七六六部隊）の一小隊長（戦隊での正式呼称は「群長」として、沖繩本島東部、中城湾内の与那原港にあつて、出撃の日を待っていた。

圧倒的な物量攻撃の前に、戦況は日を追って我が軍に不利となつた。四月中旬になると、米軍は本島中央部の中頭郡を完全に制圧した。

そして南にある軍司令部と本島中部以北所在の国頭支隊間の通信連絡は、十六日に断絶してしまった。軍司令部は、特別命により軍情報部の浦田国夫少尉（中野学校出身）ら七名を、国頭地区の米軍占

領地域に潜入させることを企図し、その挺身輸送命令が私の小隊に下された。

当時、沖繩本島を取り巻く米軍艦艇は千六百余隻といわれ、日本軍は完全に包囲されたうえ、制空、制海権とも敵に奪われていた。

何としてもこの重囲を突破し、国頭支隊と連絡をとらねばならない。

小隊は四月二十五日夜、五隻の水上特攻艇（㊟）を進水し、一行十五名は暗夜に乗じて与那原南方、板良敷の珊瑚礁の切れ目から静かに出航した。三号無線機、

暗号書類などは、浦田少尉と私が乗り込んだ指揮艇に積み、他の四艇を前後左右に配して、クロス型に編隊を組んだ。こ

れら四艇には二百五十キロ爆雷をそれぞれ搭載した。もし敵に発見されたら体当たり攻撃を敢行し、指揮艇だけでも国頭地区につけばよい、という捨て身の作戦だった。

艇隊は、エンジンの音を殺して、艇尾波を立てないよう最微速で、久高島をかすめ、針路を北にとつて、津堅島東方の海上を北進した。途中、二度にわたり米

駆逐艦に発見され、また敵機の攻撃を受けたが、全く幸運にも全速力で逃げ切り、

危機を乗り越えた。いま回顧すれば、ただ逃げるだけ艇隊は、さながらエリマキ

トカゲの逃げザマにも似ていたのでは：

と苦笑するが、一発敵弾を喰らえばお陀仏だっただけに、その時は全く悲壮な心境であった。

出航して約八時間余。艇隊は全速あるいは微速をくり返して航行を続けた。翌二十六日未明、東の空が白みはじめた頃、ようやく目的地の大浦湾に到着、スギンダ浜に上陸した。

だがすでに、大浦湾は米軍の占領するところとなり、海兵隊の根拠地になっていた。我々は上陸間もなく、敵に発見され、上陸用舟艇による攻撃を受け、白兵戦が展開された。何とか敵を撃退したもののこの戦闘で、部下の渡辺伍長が戦死、私も右足に被弾した。このままでは敵の再来襲は必至。我々は直ちに舟艇を焼却し、近くの久志岳に潜入した。

その頃、すでに国頭地区の友軍は殆ど潰滅し、名護岳、久志岳、恩納岳などの山中に撤退、割拠してゲリラ戦に移行していた。こうした国頭地区の戦闘状況を、軍指令部に無線連絡しようと努めたが、米軍の執拗な通信妨害(?)を受けて全然通じない。最後の手段として、軍司令部に決死の伝令を派遣することにし、一行は陸路行(岡軍曹ら五名)と海路行(前田見習士官ら三名)の二隊に分かれ、五月八日から九日にかけて久志岳を出発した。

両隊は五月十一日、いったん浜比嘉島で合流したが、同地で再編成し、私と岡軍曹、木村伍長の三名が先発隊となり、サバニ(沖繩特有のクリ舟)を操って、闇にまぎれて与那原に向かった。進むと約二時間、津堅島と久高島の間付近で敵掃海艇に発見されてしまった。万事休す。サーチライトを真つ向から受けた。

いつ機銃掃射を浴びるか分からない。私は舟から退避を命じた。だが木村伍長はカナヅチだった。私は琉球服の上から救命胴衣を装着していたので、それを木村伍長につけてやり、一斉に海中に飛び込んだ。サバニから五十メートル離れたとき、掃海艇がサバニに接舷した。乗員がいないことを知ると、付近の海上目がけて猛烈な機銃掃射をはじめた。

曳光弾が私の周囲の海面にブスブスと突き刺さる。そして地獄の狼火さながら、不気味な蒼白い照明弾が頭上に打ち上げられた。暗黒の海面はたちまち真つ昼間のように煌々と輝き、身を隠す術もない。私は機銃の標的にされないよう、照明弾が照らし出している間(約一分間)は海面下にもぐり、明かりが消えた途端に浮上するという動作をくり返した。だが、救命胴衣を着けた木村伍長は、海中にもぐる事ができず、機銃掃射によって散華した。

執拗な機銃攻撃は三十分くらい続いた。やがて乗員全部が死んでしまったと思つたのか、掃海艇は軽やかなエンジンの響きを海面に残して、次第に遠ざかって行った。それからさらに約四時間半、つかまる木片とてない徒手空拳の独泳は、筆舌に尽くし難い地獄の苦しみであった。

幸い追い波であった。大きな波のうねりに乗り、進行方向の右約十五度の角度をとって泳げば、目的地の知念半島にたどりつくだろうということは、照明弾攻撃のとき見当をつけていた。私はその感覚だけを頼りに泳ぎに泳いだ。月も星もない全くの暗夜である。遙か前方の知念半島にそびえているはずの宿納山も見えない。

スギンダ浜で被弾した右足は、しびれて動かない。両手と左足だけの平泳ぎの要領で、つとめて海水を飲まないよう注意し、渾身に力をふりしぼって頑張った。

ともすれば睡魔に襲われ、海中に引き込まれそうになる。私は父母の、兄弟姉妹の名を大声で叫んだ。さらに親戚、友人、知人の名を思い出すままに叫び続けた。呼ぶ名が尽きると。軍歌、唱歌、流行歌など知っている限りの歌をうたいまくった。

しかし漆黒の闇からは何の反応もなかった。静まり返った無気味な海はこのまま

狂い死にするであろう私の孤独な姿を、冷然と眺めているようだった。時折、中城湾内の米軍泊地に襲いかかる友軍特攻機の姿が目に見えた。そして特攻機は、スコールが逆流するかのような敵艦船や地上からの弾幕の中に、あえなく散っていった。

溢れる涙を抑えながら、私はいつしか念仏を唱えていた。そしてその度に私は勇気づけられていたのである。特攻機を包んだ弾幕のお陰で、前方目標の宿納山の稜線がかすかに視認された。私は間違はなく知念半島めざして泳いでいることを知った。

だがその時は、泳ぎはじめて五時間は経過していたようだ。私の体力、気力とも限界に近づいていた。私は次第に捨て鉢になっていった。ヤケクソ半分に「助けてくれ！」と怒鳴ってみたが、声はむなしく海面をなでるだけ。

そうだこの辺は敵地だ。それならばとばかり「ヘルプ！」とも叫んでみた。恥も外聞もなかった。生きるか捕まるとかを考えてのことではなかった。切羽詰まった極限の状況であった。そしていよいよ最後のときがやって来た——私は覚悟を決めた。

と、その時、左足先が何か固いものに触れたような気がした。とっさに「フカ」

だと直感した。米軍が上陸する前の慣海訓練時に、久高島周辺はフカが多いと、現地の漁民から聞かされていたからだ。だが一向に食いついてこない。私は恐る恐る左足を伸ばして確かめてみた。それは珊瑚礁だった。折からの満潮で珊瑚礁は海面下に沈んでいたのだった。

もし干潮時なら、刃物のように切り立った珊瑚礁の表面に、私の体は波浪とともに叩きつけられて、お陀仏になっていただろう。まさに神の助けであった。

私はホッとした。珊瑚礁があるということ、海岸が近いということだ。朦朧としたうつろな私の眼に、宿納山の稜線が大きく弧を描いているのが、夜目にもはっきりと見えた。「ああ、これで助かった」と思った瞬間、私は意識を失った。どの位の時間が経ったのか。敵機グラマンの轟音で私は正気に戻った。知名岬の浜辺に打ち上げられていた。モゾモゾと疲れ切った体を動かして、白砂の浜辺を這って行った。

と、その時、手に手に竹槍を持った沖縄の防召兵十数名が私を取り囲んだ。口々に「スパイだ」「殺せ」とわめいている。とんでもない。やっと思心惨憺して知念半島にたどりついたのに、ここで味方に殺されてたまるものか。

私は声をふりしぼって叫んだ「俺は与

那原の水上特攻隊の将校だ。いま国頭から連絡のため帰還したのだ」必死になつて説明するが分つてくれない。さもあるう。髪も髭も伸び放題。そのうえ。くたびれた硫球服を身にまとい、憔悴し切った姿である。「よし、貴様たち、俺を殺してみろ。軍法会議で死刑になるぞ。」と脅した。死刑といわれてひるんだのか、防召兵たちは何やら相談し合っていたが、やがて私を友軍陣地へ導いてくれた。

その友軍陣地には、たまたま転進地を視察に来ていた戦隊の同期生、大國、藤沢両少尉がいた。何という奇遇であろう。私には二人の戦友が「地獄に仏」の言葉どおり、仏さまの姿に見えたほどだった。二人も私の生還を心から喜んでくれて、その夜は、まんじりともせず、一別以来の戦況を語り合い、多くの戦死者の冥福を祈った。

その後、私は右足治療のため、知念砲台陣地に退き、軍医の手当を受けて、最後の決戦準備に移るのだが、「国頭への挺身連絡」の項はこれで終わることにする。

最後に、沖縄戦で戦没した我が将兵、民間人約二十万の英霊に対し、茲に深甚なる哀悼の意を表して擱筆する。

「追記」我々の「国頭挺進連絡」の状況は、岡軍曹によって軍司令郎に報告さ

れ。直ちに牛島軍司令官から感状が授与された。その後上聞に達して七月下旬、全国の新聞にその内容が報道されたのである。感状部隊十五名の氏名を付記する。

▽桜挺進隊(軍情報班)

- 少尉 浦田国夫、軍曹 岡幸男
- 伍長 村上千秋、同 木村勇
- 一等兵 山内豊、同 原田育甫
- 一等兵 仲地朝明

▽協力部隊(海上挺進第二十七戦隊)

- 見習士官 前田力敏、軍曹 高谷征雄
- 同 藤中恵一、伍長 佐々木良二
- 同 和泉沢文夫、同 栗原夏雄
- 同 渡辺芳次、同 竹内稲雄

昭和二十年七月二十六日 朝日新聞
感状上聞に達す
敵中突破・友軍と連絡

沖繩挺進十五勇士

陸軍省発表(昭和二十年七月二十五日)
沖繩本島の戦闘に於いて挺進部隊となり万難辛苦を克服して国頭方面友軍との連絡に成功軍の作戦に資する所大なりし陸軍少尉浦田国夫、陸軍兵科見習士官前田力敏、陸軍軍曹岡幸男、同高谷征雄、同藤中恵一、陸軍伍長村上千秋、同木村勇、同和泉沢文雄、同栗原夏雄、同竹内稲雄、同佐々木良二、同渡辺芳忠、陸軍一等兵山之内豊、同原田育甫、陸軍二等

兵中地朝明に対し先に感状を授与せられしが今般畏くも上聞に達せられたり
その戦闘概要次の如し

四月二十日軍命令により数日来通信途絶せる国頭方面部隊の状況を明らかにすべく浦田少尉の指揮下舟艇5隻に分乗、敵艦艇の至敵なる警戒を突破挺進す

同二十一日黎明大浦湾に達し上陸後所在の敵と交戦せるも巧みに敵中を潜行、久志岳に至り友軍部隊と連絡し状況を無電により軍に報告す

爾後連日東奔西走各方面の状況を詳らかにしつつ果敢なる遊撃戦を敢行多大の戦果を収む。

五月八日軍との無線連絡途絶のため岡軍曹及木村伍長直接報告のため帰還の途につく爾後兩名は万難辛苦して敵線を突破す

同十二日兩名金武湾に到着、くり舟を利して浜比嘉島に渡り、更に与那原に向かえるも津堅島付近に於いて敵掃海艇の攻撃を受け勇戦せるも木村伍長斃れくり舟も沈没の苦境に陥る、

岡軍曹決意固く十余料の海路を力泳帰還し遂に使命を達成し軍爾後の作戦指導に資したり。

付記(伊藤 正)

当然のことながら、感状の原本は戦火のなかに消失して存在しない。また、陸

軍省発表の内容にも日時や氏名に誤りがみられるが、これは当時の無線通信の混乱を物語るものである。ただ、中城湾を泳ぎ切り帰還に成功したのが岡軍曹のみとなつて前田小隊長の名が見えないが感状の原文が、五月十七日夜、私(伊藤)が首里の軍司令部壕で岡軍曹に会い、前田小隊長の無事帰還を伝える以前に急ぎ作成されたからであると思われる。

なお、桜挺進隊の行動が上聞に達し、陸軍省発表の形で全国民に報道されたことなど、関係者の誰も知らないことであつた。今回、朝日新聞社広報室の好意によつて本記事を人手し、往時の関係者に供する次第である。

沖繩作戦 海上挺進第二十七戦隊史抄

第三中隊長伊藤 正

一、与那原地区の戦闘

昭和20年4月、第32軍船舶団隷下の海上挺進第27戦隊(戦隊長岡部茂巳少佐52期)は、主力(本部・2中・3中)を沖繩本島東岸の中城湾にある与那原港の周辺部に、一部(1中)を西岸の那覇港入江に展開して作戦に従事し、4月25・26・27日、及び5月3日の4回に及ぶ海上攻撃を実施した。そして5月3日の軍総攻撃に当たつて岡部戦隊長は中城湾に出撃して戦死をされ、与那原地区の戦隊の指

揮は2中隊長の児玉健中尉(56期)が執ることとなった。

また隊はこれまでの海上攻撃と連日の海・空・陸からの砲爆撃によって5月10日頃には戦隊の総員104名中42名が戦死し、ベニヤ板製の攻撃用舟艇の全てを失ってしまった。

そこで、5月13日、船舶団司令部は、与那原地区の戦隊に対して中城湾の南東部を扼する知念半島地区に転進を命じた。しかし、この日児玉健中尉が駆逐艦の艦砲射撃により戦死をし、代わって3中隊長の私(伊藤正57期)が与那原地区の戦隊の指揮を執ることになった。

二、知念半島の戦闘

そして20日より転進を開始して、23日、知念半島知念岬に残置されていた重砲7連隊の陣地壕跡(知念砲台)に集結を完了した。この時の集結人員22名で、装備兵器は、拳銃、手榴弾、100式機関短銃1、軍刀、爆薬若干という有様であった。

また当時戦隊には通信1箇分隊(5号無線)が配備されていたが、5月28日、軍参謀部命令としてつぎのような入電があった。

在知念27戦隊は、軍態勢変換後、敵の背後にあって情報の収拾に任ずべし。突然にこの命令を受けて大きな戸惑い

を感じたことは事実である。そして既に軍司令部は首里を捨てて遙か南部に下がり、我々は敵中に残置される運命に立たされたことを知った。この命令に当時は身の不運を嘆いたが、結局はこの命令に拘束されて知念半島を動かずに行動して終戦に至り、玉砕を免れたことになる。

1、国頭地区への連絡
別紙 櫻挺進隊にて詳述のため、本報告では割愛する

2、知念半島の遊撃戦

無線が途絶してしまったので2中隊長の古賀清隆小隊長(幹11期)を連絡のため南部の湊川方面に派遣したところ、6月2日、独混44旅団命令として次のような命令が伝達された。

在知念27戦隊は、知念半島周辺において遊撃戦を実施すべし。もともと地上戦闘能力のない部隊で如何にすべきか苦慮したが、米軍接近の報もあり、ただちに知念砲台を出て分散配置を命じて戦闘態勢に入った。そして翌3日10時、予想の通り米軍(7D)が知念半島に進出し、われわれのような小拠点を無視して更に南部進出していった。だがこの間に分散配置の各隊と交戦があつて、6名の戦死者をだし、戦隊の戦力は更に低下していった。そしてこれ以後、米軍の真っ只中に孤立して持久を策せざるを得なくなった。

また昼間の行動は不可能になり、あらゆる行動は夜間に限定されてしまった。

6月21日、日出より湊川方面の米軍の砲声激烈を極め、およそ正午をもって全戦線の砲声が一斉に止んで島に静寂の空気が流れた。その時私は米軍の司令官が砲兵に対して撃ち方止めを令したのではないかと思つた。しかし、わが軍の軍司令部の動向については知る由もなかった。

この頃の南部海上には米駆逐艦や上陸用舟艇が蝟集して、その甲板に並べられた発射台から一斉に発射されるロケット弾は、黒い束になって落下してくるのがよく見えて、そのすさまじさと物量にはただただあきれるばかりであった。

また、この頃より米軍の南部よりの反転北上部隊による掃討作戦が展開されて、連日既設の壕の爆破作業が行なわれた。私たちは再度知念砲台に入っていたが、壕口を爆破されて埋没してしまい、暗黒のなかで脱出の作業に苦心をした思い出がある。そこでこの苦い経験から既設の壕に入ることを避けて、知念半島にある沖繩最大の聖地である斎場御嶽の男岩を拠点として持久を策した。

6月23日(推定)朝、友軍の特攻機1機が低空で飛来して、久高島沖で米駆逐艦に突入するのを望見、残念ながら撃突直前に海面に落下して、その水煙に駆逐

艦の舳先が突っ込んでいくという有様であった。この時期に、しかも超低空で沖縄まで到達した特攻機の操縦者は技量抜群の勇者に違いない、その人の名が判らないのが残念でならない。

6月28日、米憲兵将校より民間人を介して24時間の猶予と生命の保障を条件に投降勧告を受けた。その折、彼は多くの日本兵を救出したと例を挙げて伝えてきたが、われわれはこれを断固として拒否をした。そしてその夜、翌日の報復攻撃を予測して、久手堅部落の南方に望みされる米軍幕舎に手榴弾による切り込み攻撃を実施した。玉砕覚悟の攻撃であったが、近接してみると予想外の大きな部隊で、その歩哨線との戦闘に手榴弾を使い果たして撤退せざるを得なかった。その翌日の報復攻撃の激しさ、われわれは御嶽の男岩の上に平伏して日没を待つ以外に方法がなかった。

7月に入ると米軍の姿は次第に少なくなっていくが、代わって軍事施設の作業が増加していった。そこでわれわれはその作業場に潜入して作業機械の破壊や妨害を行って任務の一端とした。

この頃の食料は、さつまいも・さとうきび・海岸漂着物などであったが、飢餓状況は日増しに募って大変であった。そして何よりも不思議であったのは、知念

半島一带に友軍の姿を全く見なくなったことで、孤立無縁の思いを一層深くしていった。そして昼夜転倒の生活のせいか、何時しか日時の特定期も困難になっていった。

三、終 戦

多分8月14日の夜だったと思うのだが、突然海上の艦艇が一斉にサイレンを鳴らして対空射撃を始めた。すわ特攻機の飛来かと思ったが、艦艇は何時もと違って煙幕を張らなかつた。そしてこれに呼応するかのように近くの米軍の宿营地からは小銃の乱射乱撃とお祭り騒ぎのような大騒ぎが起こった。

わたしたちにはその意味は全く判らなかつたが、翌朝中城湾にはこれまで見たことのない巨大艦が投錨していた。さらに不思議だったのは、翌日より米兵の警戒が極度に弛んだことであつた。

それから数日して、飢餓状況がいよいよ限界に近づいたので、体力のあるうちにと意を決して、2 Kmほど南の知念部落の入り口にある米軍の物資集積所に潜入した。米軍は時折ジープで巡回にきたが発見されなかつた。そしてその監視人をしていた民間人から戦争は8月15日で終わったということを告げられた。しかも無条件降伏で。この間の夜の発砲騒ぎは日本がポツダム宣言受諾の祝砲であつた。

た由、さらに広島に原子爆弾が投下された話、沖縄の米軍は日本本土および朝鮮半島に移動中であること、そして沖縄の日本軍が屋嘉の收容所に集合を開始していることなど具体的な情報の数々を教えてくださいました。さらに若いわれわれに戦争が終わったのであるから生還されるようにと諭すことを忘れなかつた。

そして背負えるだけの食料を貰って基地に向かつて帰りを急いだが、あまりの驚きに、私の脳裏には「嘘だ。騙されるな。」という叱咤の声が疼いていた。このことがあつてから、私たちは日本降伏の情報の真偽の確認を急いだ。

そして部落の区長からの情報提供と、米軍の機関紙である星条旗紙などによって日本降伏の事実を確認できた。

この間、ほぼ10日前後を要したと思うが、地元区長の仲介によつて米軍と交渉をもち、米軍の軍門に降つたのは9月2日の朝8時頃であつた。場所は知念半島の知念村久手堅部落入口である。そして降伏にこの日を選んだのは横浜で日本降伏の調印式が行われるとの情報に合わせたことであつた。

なお那覇港地区配備の1中隊は、生存者1名で、終戦時の状況は不明である。また、隊編成時の総104名中、戦死80名、復員24名であつた。

顕彰譜(3) 会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜の
ご紹介第三回です。

海軍航空
鹿屋特攻基地の碑
特攻隊戦没者慰霊塔



鹿屋基地は海軍の沖繩作戦における中核基地となり、昭和20年2月第五航空艦隊司令部が置かれた。昭和19年7月には空地分離で基地は九州空の管轄するところとなっていた。

この基地から昭和20年3月11日、菊水部隊特攻隊(銀河13)が西カロリン諸島ウルシー泊地の米機動部隊攻撃に突入したのを皮切りに、3月18日には菊水部隊銀河隊の主力が米機動部隊の特攻に出撃していった。

事後天一号作戦間、神雷部隊の桜花特攻部隊(桜花、陸攻、零戦)と爆戦隊、そして各地からこの基地に集結して出撃した爆戦隊の神剣隊(大村空)、筑波隊(筑波空)、七生隊(元山空)、昭和隊(谷田部空)のほか、菊水部隊の天山隊、白菊隊と徳島空の白菊隊等がこの基地で戦備を整え、米機動部隊或は沖繩周辺艦船攻撃に突入していった。

合計六七隊、四四七機、七五五名の猛攻を記録している。昭和33年3月鹿屋市及び海上自衛隊鹿屋基地が中心となり特攻隊戦没者慰霊塔建定期成会を結成し、この碑を小塚丘公園に建立し、例年4月の第一土曜日に盛大に慰霊祭をとり行っている。

所在地 鹿児島県鹿屋市今坂町小塚丘公園

建立 昭和33年3月20日

問合せ先 鹿屋市福祉政策課

(〇九九四一三二一一一三)

海軍航空

申良特攻基地の碑

申良海軍航空隊出撃戦没者慰霊塔



由来記

昭和19年4月申良基地は整備員養成航空隊として開隊され、昭和20年2月には九州空の指揮下に入った。沖縄作戦においては鹿屋基地に次ぐ大特攻基地の役割を果たしている。

4月6日菊水一号作戦下令とともに菊水部隊天山隊、第3御盾天山隊、第一八幡護皇隊艦攻隊、第一護皇白鷲隊、第二一〇部隊彗星隊の44機、12名の大挙出陣を皮切りに、他部隊からこの基地に進出した艦攻隊の護皇白鷲隊(姫路空)、白鷲揚武隊(宇佐空)、天桜隊(九〇一空)、正気隊(百里空)、八幡護皇隊(姫路空)、菊水雷桜隊(九三一空)、皇花隊(百里空)、八幡神忠隊(宗佐空)、白鷲赤忠隊(姫路空)、八幡振武隊(宇佐空)、常盤忠華隊(百里空)、艦爆隊の八幡護皇隊(百里空)、草薙隊(名古屋空)のほか、最後には徳島白菊隊の5隊がこの基地から続々と沖縄周辺の艦船攻撃に出撃していった。合計26隊、136機、340名の猛攻記録を残している。

昭和44年地元町長が中心となって建設期成会を結成し、この慰霊塔を旧滑走路跡に建立し、出撃特攻隊員の鎮魂と偉勲を顕彰している。

慰霊祭は毎年10月10日に近い土曜日に厳粛に挙行されている。

所在地 鹿兒島県鹿屋市申良町平和公園内

建立 昭和44年10月11日

問合せ先 鹿兒島県鹿屋市申良町岡崎

二〇八一番地

申良総合支所内 住民サービス課

(〇九九四一六三三二二二)

海軍航空

国分特攻基地の碑 特攻機発進之地碑



由来記

国分基地は昭和18年出水空分遣隊として設けられ、昭和19年8月国分海軍航空隊となった。昭和20年に入って第五航空艦隊の基地を束ねる九州空の傘下に入り、天一号航空決戦の特攻基地となった。

3月18日菊水部隊彗星隊（彗星・爆戦）が九州南東海面の敵機動部隊に突入したのを先陣として、第3御盾隊の二五二部隊、六〇一部隊（彗星・爆戦）のそれぞれ4回にわたる出撃に加え、さらに第二〇一部隊の彗星隊と零戦隊および第2菊水彗星隊が、この基地から沖繩周辺の敵艦船に突入散華していった。

この碑はこの基地出撃の二百余名の特攻隊員の慰霊と平和祈念のため、昭和39年国分市、自衛隊、一般有志の募金と陸上自衛隊国分部隊の労力奉仕によって旧戦闘指揮所跡に建立されたものである。

慰霊祭は毎年4月22日近くの日曜日の午前に行われている。

所在地 鹿児島県霧島市国分福島

二一四一四 陸上自衛隊前

建立 昭和39年8月15日

問合せ先 霧島市国分中央三一四五一一

霧島市役所総務課

(〇九九五―四五―五一―一)

連載山ある記15

長野県「乗鞍岳」

会員 池田 康博

暑い夏にはより高い山へと、7月26日(令和元年)に乗鞍岳に向かった。しかし、太平洋沖にあった熱帯低気圧が台風になってこちらに来るという予報に、標高千五百七十mの鈴蘭橋バス停車場からの一泊二日の登山日程に不安を覚えたため、止む無く(?)標高二千七百mの乗鞍畳平までバスで行つての日帰り登山とすることに變更した。

二十七日は、乗鞍周辺の天気予報「午前中は曇り」を信じて、9時7分、畳平出発、小雨模様であったが雨具は着用せずに乗鞍岳に向かった。

行程は、畳平の鶴ヶ池に沿って大黒岳方向に歩き、バス道路との合流点に達したら、折り返すように大黒岳に背を向けて、乗鞍の最高峰「剣が峰」に向う。同じ方向の摩利支天岳には、東大の宇宙線研究所観測所があるせいか道は広く歩きやすい。ここからは左手が富士見岳の斜面になっており、この時期は高山植物の王様と言われるコマクサが一面に咲いていた。しかし、天候が気になり写真もそこそこに先を急ぐ。やがて、富士見岳分岐を過ぎると、今度は左手が谷側となつて、下方に乗鞍大雪渓が広がっている。そこでは大勢のスキーヤーが滑っていた。雨はだんだん激しくなり上着は雨

具にしたが、ズボンは既にかなり濡れていたこともあり雨具は着なかつた。9時40分、宿泊するはずだった「肩の小屋」に到着。ここで観測所へ向かう道と分かれ、いよいよ乗鞍岳への登山道に入る。

登山道は、最初はザレた緩斜面であるが、徐々に傾斜がきつくなり、やがて溶岩でできた九十九折の道となつた。強い風は吹くわ、雨とガスで周囲は全く見えないわで、滑らないよう濡れた岩塊をしつかり踏んで、一步一步ひたすら登るといふ格好になつた。やがて道は再びザレ道に変わり、前方に標柱がぼんやり見えてきた。「着いたか」と思つて寄つてみると標柱には何も書かれていない。時刻は10時15分、山頂とは思えず、周囲をよく見ると下つてはいるが登山道はまだ続いて

富士見岳のコマクサ



いるように見える。そこで先に進むと、前かららぼんやり人が現れたので、山頂はまだ先だと分かつた。再び登りとなり、ゴロゴロとした岩の中に囲まれて建つ



乗鞍岳山頂

ている「頂上小屋」に辿り着いた。ここからいよいよ最後の登りになる。強い風と足元しか見えないうち、やつと山頂の乗鞍

権現社に着き、風に飛ばされないよう気を付ながらお社の後ろ側に回つて山頂の標識までたどり着いた。標高三千二十五m、10時26分であった。早々に下山にかかったが、すぐ下の頂上小屋に立ち寄り、管理人に話を聞くと、乗鞍岳ではもっと強烈な風が吹くこと、そんな時でも登る人はいるといふことで、感心しながら下つて行つた。雨はすっかり本格的で、畳平のバスターミナルに着いた時は、下半身はずぶ濡れで寒気も強く、服を全部着替えて下りのバスを待つて帰つた。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 雨よ降れ 桿持つ君が 征かぬよに

淳

● 空晴れて 南の海の そのはてに

雲跡残し 君は飛び征く

淳子

● カブトムシ 追いし夏の日 懐かしき
よみびとしらず



● 風鈴とステテコだけで過ごす夏

● 打ち水や喧嘩のネコにホース向け

井下駄マスオ

事務局からの報告等

一 第70回特攻平和観音年次法要について

本年も特攻平和観音年次法要が令和三年九月二十三日（木曜・秋分の日）の後二時から世田谷山観音寺において斎行されます。ただ、まだコロナの終息のめどが立っていないことから、英霊には誠に申し訳ないことですが、皆様の安全と健康を考慮し、昨年同様、規模を縮小し、当顕彰会の役員が代表して、特攻観音堂内において実施する事と致します。皆様には何卒ご理解を賜りますようお願い致します。来年以降は落ち着いて、例年通りの法要が斎行出来ることを祈っております。

なお、年次法要にお布施をお寄せいただきました方は、御芳名と共に世田谷山観音寺に奉納させて頂きますので、同封の「郵便払込取扱票」によりお払込みください。（一名分、三千円）

二 年会費未納入の方にお願

今年度（一月から十二月）の年会費を既に頂いている方には、同封の「郵便払込取扱票」の年会費欄に二重の消去線を入れています。

現時点で未納の方には、消去線を入れていません。また、「年会費納入のお願い」も同封してありますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

三 「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。同封のチラシのとおり、4年度のカレンダーはリニューアルしたものとなっております。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

四 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになつた場合は、「○○様方」まで必要となりますので、電話やメール或は、払込取扱票の空欄に記入して頂くなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

入れています。

現時点で未納の方には、消去線を入れていません。また、「年会費納入のお願い」も同封してありますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。同封のチラシのとおり、4年度のカレンダーはリニューアルしたものとなっております。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになつた場合は、「○○様方」まで必要となりますので、電話やメール或は、払込取扱票の空欄に記入して頂くなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

寄付者御芳名（敬称略）

（令和3年4月1日～6月30日）

（単位千円）

- 一〇〇〇 多田野 弘
- 一〇〇〇 吳 奈々子
- 一七 ファンデルドウス瑠璃
- 一〇 三好 達
- 一〇 齋須 将
- 七 橋口 俊一
- 七 田辺さだ子
- 七 吉満 正広
- 七 中田 晃文
- 七 花輪 悦子
- 七 浅井 真貴
- 七 尾中 信仁
- 五 高橋 芳幸
- 三 望月 賢一
- 三 水気 博美
- 二 江副保次郎
- 二 三河内健作
- 二 中村 真

新入会員名簿(敬称略)

(令和4年1月1日～6月30日)

- 二 紺谷由喜夫
- 二 川本 修二
- 二 生峯 和代
- 二 福島 八郎
- 二 石上 豊
- 一 殿谷 章

東京 清水 俊雄

宮倉 崇

松本 敏夫

加藤 大貴

神奈川 長谷川和弘

山梨 青沼 巖

静岡 中村 倫子

大阪 村田 里佳

東京 濱野 明

(2・11)

田中 永信 (3・2・1)

齋須 重一 (3・3・30)

江藤 武俊 (3・5・2)

中曽根慶蔵

富山 塚本 一郎 (2・1・24)

奈良 中溝 二郎 (3・5・19)

岡山 小野 恒夫 (2・11・30)

愛媛 川人 明美 (3・4・14)

福岡 野村 純雄 (2)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員 3000円

・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛として下さい。
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7
東専堂ビル2階
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電話 03-52213-4594
FAX 03-52213-4596
E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp